

雲の神の帳落し、此の清六でも御婚様に御取りなされたら、飯も焚かうし湯巻も洗ふ、當年取つて四十五才の苦勞人、雪姫様の御氣に入りますまいかな」

青井「コリヤ、冗談にも申すなよ、少祿ながらも大名の列に加はる松平様、五萬五千石の姫様が茶店の主と縁が組めるか、馬鹿者め」

清六「デモ戀に上下の隔なし、若し惚れられたら何んさしよう」

赤井「ヤイ、面でも洗ふて来い、八重垣様には年立つ白狐が住ふと聞いて居る撮まれてでも居るのでないか」

清六「クワンクワン」

ト狐の鳴き聲をする。

二人「此奴氣味の悪い話だわい」

ト眉に唾をつける、囃子ドロクになり、燈籠の後より白狐いで来る、色々手眞似をする、青井赤井一寸狐に撮まれし科にて兩人膝をつき、

青井「ハア、何に、雲姫君がお越しみな」

赤井「ハア、只今夫れに」

ト兩人は一文字笠の代に笠と盆と溢團扇を持つて可笑しく立上る、清六は呆れる科

清六「コレ、誰方様も居らぬに、何を申てお出でなさる、其んな物を持つて何うなされますな」

青井「無禮者め町人、姫君様の下馬先だ、」

赤井「御先き揃つた行列に立ちはだかつて、無禮で有らう」

二人「下に居ろ」

ト囃子大拍子になり、兩人狐に欺されて白狐について上手へは入る。

清六「コレ、何うやらレコに」

ト手で狐の眞似をして、

ト後を追うて上手へはいる、と直ぐ白狐出て後先き見廻し、

白狐「人間程脆い者はない、直に私の自由自在ぢや、今日お花見の姫君は名に高い雪姫様、雪より白い美しき數多の女中に取り巻かれ、蘭麝の衣裳に包まれて、甘い物は喰ひ次第、ア、あんな身に成りたいな、ヨシ／＼今にもそれへ来りなば今日一日丈け代つてやらう、御邸も見物してけんぞく共への土産話、イザ来い来たれ思ひの儘に」

ト此時上手にて、

皆々「姫君様の御立ち……」

白狐「さらば慥うしてこまそうか」

ト薄ドロの太鼓を入れると、上手より腰元白菊、紅葉、松ヶ枝、梅ヶ枝、桐壺に手を取られて、雪姫君好みの姿にて出来る、後より乗物に附いて青井、赤井の近習を始め供待何れも一文字笠袴の股立高く取り、大勢附添ひて出で来り、舞臺中央に乗物を下

ろす。

桐壺「姫君様申上り、今日は花に浮れて徒行あるき、御邸内も御手車一寸出るにもお乗物馴れぬお御足、嘸ぞや、嘸ぞ」

白菊「御供致せし我々こそ、年に一度の御花見に」

紅梅「櫻見よごて名をつけて先づ朝櫻夕櫻」

松ヶ枝「宜い夜櫻も見たけれご、下向を急ぐ御身上」

梅ヶ枝「西へ入り日の夕ばえに、姫君様にも嘸お勞れ」

桐壺「お察し申し」

四人「上げまする」

雪姫「何んのいの、行き暮れて木の下蔭を宿させば、花や今宵の主じなるらん、かゞり照り添ふ夜櫻も一入見事と思へ共、月に叢雲花には嵐、時雨を厭ふ花びらに心ろ掛りな此の雲行き」

青井「成る共く、櫻に雨は性悪るな、櫻に菖蒲の其の中へ、坊主と松と桐に鳳、飛んだ五光の二十八貫」

赤井「流れぬ先きの高名で、御下向有るが良き吟味」

青井「お手上りかご」

二人「存じます」

雪姫「絶體絶命下向致そふ」

ト山寺の鐘の音を聞かす。

「山寺の鐘つく撞木は生木のゆへ」

桐壺「つく度毎に」

皆々「日が暮れる」

雪姫「入相の鐘に花や散るらん」

トドロくの太鼓にて皆俯き狐に欺される科、雪姫は中央に俯き居る、白狐いで來り

て手招をする、雪姫は白狐の手招に連れて上手へ這入る、白狐は乗物の中へ飛び込む之にてドロくの太鼓を止める、一同ハツト心付き、

青井「花曇にてうつこりい」

赤井「夢心地なる今の間に」

桐壺「ヤ、姫君様の」

皆々「お姿が……」

青井「かたぐ油断召さるな」

皆々「心得ました」

ト此の時駕の中より、

狐「皆の者騒ぐまい、自らは安體ぢやぞや」

ト此の聲にて赤井、青井は駕を開けて、

青井「ヤ、姫君様」

赤井「御身にお怪我が」

皆々「御座りませぬか」

狐「オ、無事ぢやぞへ、日が暮れる下館を急ぎや」

皆々「ハア……お立ち……」

ト大拍子の囃子にて一同花道へはいる、直ぐ雨音になり、下手より浪人白石武之進走り来り、

白石「花時に有り勝なバラ／＼バット一ト時雨、時雨を厭ふ唐傘の濡れて紅葉の長樂な、可愛い子には旅をさせよ、武者修業には出たれ共、腕に覺へは一寸もなし、音に聞いたる八重垣様、縁を結ぶの神に聞き、一心込めて祈りなば、何處の娘に思はれて、ズル／＼ベツタリ婚養子、何卒利益に預りたいナ」

ト神前を拜むと、清六上手より来かゝる。

「ハ……八重垣様始めてお目に掛ります、某事は中國邊の浪人にて白石武之進

ご申者、此後は御見知り置れ御利益を授け下されませう」

青井「へエ……何卒此方も御最眞に」

白石「ハ、アこは有難き神の御告げ」

ト清六を見て、

「ヤア其方や何んだ」

清六「へい／＼茶店の清六めで」

白石「ヤア無禮な奴め、武士が祈禱の面前へ立はだかつて慮外千萬、下がれ／＼下りおらうぞ」

清六「へエ／＼」

ト恐わ／＼下手へ来る。

白石「儲て八重垣様、當年取つて二十八才、武門の家に産れながら、持て産れた臆病に、かて、加へて劍道の腕に覺へは一寸も無い」

清六「ハアお前さん、劍術知らんのか」

白石「エ、黙れ、控へ居れ、武者修行さいでたれど、何處の道場でも負けさうし」

清六「餘程弱いのだなア」

白石「エ：又しても口出し致す慮外者、今一ト言云つて見よ、己ぬ手は見せぬ」

清六「ウワー——」

ト茶店へ逃げてはいる。

白石「ウフ、、服に傷へは一寸も無いが、武士の道具の一本差、反りを打つて見せてやつたら、一目散に逃げよつた、あゝ有り難き刀の看板……さて八重垣様一心込めての御願は能く芝居でもする如く御大身の娘御が、悪者共に手込にされ、嗟哉！見る間に其の中へ身共が參つてポイント投げ、助けて遣つて見合す顔、身共は御覽の男振り、娘は忽ちポット來て、戀のいろはの習ひ染め、兎角邸へ御供致

し、さらばお言葉に隨うて其れから舞臺が盆廻し、先づ四五日はお客分、鰻玉子の暴れ喰ひ、隙を窺ひ其の娘が、身共の傍へ寄り添うて、始めて御見受け申てより、水際の立つ男振り、ぞつこ身に染む戀風に、忘れ様にて忘すられぬ、不惑と思ふて何卒叶つて下されませ、お心根は嬉しけれど、不義は武士のきつい法度左様な事は成り申さぬテナ事申しまするご覺悟極はめし懐劍の、緋房の紐をキリキリと解くご其の儘手を掛けて、あはや自害ご見へけれど、コリヤ短慮な何事ぞ、戀の叶はぬ其時は、兼ての覺悟早や左らば、其れは短氣な、夫れでは叶へて下さりますか、サア其れはサア、何うぞ叶へて下さりまいなア、マ、是非に及ばぬご言ふ様な寸法にお願い申上げまする」

ト此の内ウズドロ太鼓になり、雪姫上手より來りて仆れる、白石は驚き、

「ヤア之りやごうぢや、天から降つたか地から沸いたか、花も恥ぢらふ美しい、御大身の御姫様餘り利益が早すぎる、ハア有難う御座ります、マアマ

ア姫君く御氣がつかまりましたか

雪姫「ヤ、自からは何時の間にもやら慙んな處へ」

白石「左りごは氣味の悪い、手前臆病で御座るで、御手弱らかに御願ひ申上ます」

雪姫「そうして貴方様は」

白石「某事は中國邊の浪人白石武之進申する者、八重垣様へ參詣の目先へ、貴

女がキヨロくバツタリ付れた故、吃驚仰天御介抱申上ました」

雪姫「ア、恥しやあられもない、知らぬ殿御に介抱受けて、お恥しいやら嬉しい

やら、御恩は決して忘れませぬ」

白石「註文通りになつて來たぞ」

雪姫「自からは杵築の城主松平左京太夫が息女雪姫申す者、澤山な者に供をさ

れ此の八重垣様へ御花見に参りましたる下向道、何時の間にもやら氣が遠くなり、

供の者にも取りはぐれ、夢心地にてツイ此處迄恥しい處を御見につけ、面恥くぞ

んじますお急ぎなくば下邸迄、御禮も致し一日の御宿も致したう存じます」

白石「愈々註文通り、急がぬ旅の天然浪人、御辭退申す善なれど、一樹の蔭け一

河の流れ袖擦り逢ふも他生の縁、お構ひなくば御供致して一夜の宿の無心申さ

ん」

雪姫「左様なれば御慮外ながら」

白石「御供致すで御座りませう」

雪姫「ドレ自からが道知るべを」

ト下手を見る。

白石「夢なら覺めな」

ト身振るいをする、木頭にて道具一轉する。

(2) 松平家下邸奥座敷の場

本舞臺上手下手共黒塗障子、家體正面紋散しの大襖、向ふ廊下を見せ、
廣間の體よろしく、此の模様にて琴唄にて静に幕明く。
ト以前の腰元四人、障子家體の方に平伏なし居る。

白菊 「ハア……姫君様に申上ます、桃の節句の白酒にお酔ひ遊ばし其の儘に」

紅梅 「雛段前にお休みはモシ御風でも召しては大事」

松ケ枝 「其の上何時に無き高鳴、殊に姫御前のあられもない」

梅ケ枝 「寢言にあらず時折に、クシン〜ミ仰るは」

白菊 「御身に何處ぞお觸りが有るのでないか、御母堂様も先程からきつい御案
じ」

紅梅 「御氣もじ悪るか」

皆々 「御座りませぬか」

ト之れにてウズドロを聞かし、障子の内にて、(○)印は狐

雪 姫 「桃の節句に食べ過ぎし、ツイ轉寢の肘枕、氣恥しい、今其處へ行くわいの
ふ」

ト上手障子より雪姫靜に出る。

「オ、皆の者宜ふ來やつたのふ」

白菊 「御機嫌悪うは」

皆々 「御座りませぬか」

雪 姫 「何んのいのふ、宜い心地で現つ現つ三姫御前の身で轉寢、雛様の前も恥し
い、化も現れて、だらしのない、何も出しては居なんだかへ」

皆々 「出したさは何が」

雪 姫 「私の尻尾が」

皆々 「エ——」

雪 姫 「ウムイヤサしつほり濡る陸言の立て雛様の其の前で、はしたない轉び寢を

必ず人に云ふまいぞ」

皆々「心得ました御座ります」

雪姫「必ず母上にも云ふまいぞ、用事が有れば呼ぶ程に皆も下りや」

白菊「左様なれば姫君様」

紅梅「御免なされて」

皆々「下されませ」

ト四人の腰元下手家體へはいる、雪姫は後先き見廻し狐の形になる。

雪姫「ア、恁んな事なら来るのぢやなかつたのぢや、大名のお姫様は苦しいものぢや、何んほ甘ひ物喰べあいても、ア、皆の者にかしづかれては、氣が詰つて落付かぬ、之れなら矢張り穴の中で餌を喰ふ方が氣が入らぬ、逃げ出さうにも勝手は知れず、飛んだ處へ化けて來たなア」

ト四ツばいになつてウロ／＼して居ると下手より賤機の前出來り、

賤機「雪姫／＼之れにかへ」

雪姫「アイ……」

賤機「我が身は飛んで居やつたのふ」

雪姫「アイ餘り御腹が大きい故、御腹空しにツイ一寸」

賤機「あれまあ幾才になつても子供ぢやのふヲホ、、、」

雪姫「ヲホ、、、」

二人「ヲホ、、、」

ト笑ひになる、花道より桐壺いで來り、

桐壺「ハア……申上げます、只今御門前へ中國邊の浪人にて白石武之進様ご申す方は非奥方に御目通りご参りまして御座ります」

賤機「果てなへんな取次わいのふ、相見し事も無い方に御目に懸るも面はゆし、御用の筋も聞いて見や」

桐壺 「仰せまでも御座りません、何度もく伺ひましたが、謂ば當家の一大事御取次には申せぬご、たつての仰せ 據なく伺ひまして御座ります」

賤機 「ハテ家の大事は心掛りな、夫れでは逢ふ故御上げ申しや」

桐壺 「ハア……」

ト花道の方を向き、

白石 「御女關の御浪人、奥方様の御召しイザく御通りなさりませふ」

ト誂への鳴物になり、花道より白石武之進出來り、

「ハア：御大身の御奥へ押して推參、御免なりませ、某事は通り掛の武者修行、白石武之進ご申者、御見知り置かれ下されたい」

賤機 「申後くれし妾は當下邸の主じ賤機ご申者、聞けば當家の大事ごやらにて御越しのやふ、シテ其の仔細は」

白石 「實は當家の御息女雪姫様が」

ト雪姫を見て、

「イヨ——之れはく雪姫殿、左りごは腹悪な何時何處さう廻つて母御の前で眞面目顔、御叱り受けるが怪い故、先きへ參つて母上に詫びて呉れよと言ひながら、拙者を出し抜き先き廻り、お人の悪いなされ方、モウ母上に何にかも御物語をなされましたか」

賤機 「あれまあ此方はいのふ、許も無きにヅカくご、姫ご馴染かなんぞの様に此方は一寸阿呆ぢやのふ」

白石 「之れはく御挨拶、諸ては様子を御存じない、今日八重垣神社の邊にて供にはぐれて只一人、ウロくするをお助け申し、お供致した武之進、コレサく姫君様、何んごか云うて下さりませ、拙者が阿呆に見へまする」

雪姫 「見た事も無い浪人、助けられた覺へはなし、キヨロくする顔つきは一寸

阿呆ぢやなア

白石「阿呆ぢやなアミは情けない、先刻お助け申した時、一夜の宿の御言葉故、お供致した武の進、ヨモヤお忘れでは御座りますまい」

雪姫「そんな阿呆な顔は知らぬわいなア」

白石「何うでも知らぬお仰るか」

賤機「知らぬも道理、暮れぬ内歸館致した雪姫が、此方さ来る筈が有らうか」

白石「餘り話が甘好ぎた、恚んな不思議な事はない」

ト花道の方を見て、

「イヨ——人悪るな姫君様、大名の姫君まで油断のならぬ身共を一杯かつがうてな、阿呆顔は餘まりな、ほんに母御も洒落た人、暫くく〜コリヤ御母公も走るは、貴方も人悪るな、ヤア姫君、飛んで来るのか流れるのか此方は一體何う廻つて」

賤機「ハテ何處へ行かうぞ先きから此處に恚うして居る雪姫」

白石「ウツム……」

ト仆れかける、

賤機「御浪人ごうなされた」

ト白石は稍思入有つて賤機を手招し花道の方を指して見せる、賤機もギョツと驚く思入有つて雪姫に向ひ。

賤機「のふ雪姫、此の御浪人に内談あり、暫し此の場を遠ざかりや」

雪姫「あの自らを」

賤機「ソレ桐壺姫を彼方へ遠ざけやいのふ」

桐壺「畏まりました姫君様には、先づ御越し遊ばされませう」

ト宜しく三人氣味合、唄になり薄ドロを入れて桐壺の供にて雪姫上手へ入る。

白石「御覽遊ばせ奥方様」

賤機「髪飾からなりふりまで」

白石「徹塵違はぬ雪姫殿」

賤機「親が見てさへ間違ふもの」

白石「他人が見たれば尙の事」

賤橋「何れが、ざれやら」

白石「ごつちがざれやら」

賤機「判らぬ所が」

白石「身共の阿呆顔」

賤機「いでや實否を」

トキツト極ると、

白石「早まり給ふな、先ヅく拙者に御任せ暫くお下に」

ト賤機を坐らし、花道を見て、

「雲姫君母御の御許し、ズズ……すつとお通り候へ」

ト之れにて唄になり、花道より本物の雪姫出来り、

雪姫「母上様只今歸館致しました」

賤機「雪姫、其方は何處から歸つた」

雪姫「アイ八重垣様にて供にはぐれ、此の御浪人の御世話になり、此の下邸迄送

られて」

賤機「シカト左様か」

雪姫「アイ」

賤機「數多の者にかしづかれ身は乗物に有りながら、はぐれたなごこは受取れぬ

嘘を云やるご許さぬぞ……」

雪姫「サア其の御叱が恐さに此の御浪人にお詫を頼みお次へ控へて居りました、

申し白石様、母上の御心の柔くやう、何卒取なし下されませ、お前が便りで御座

んすわいな」

白石「チホ、有難いな嬉しいなア」

賤機「何んの嬉しい事が有らふ、雪姫それへズツト出や」

白石「アイヤ事荒立ては家中の聞へ姫君様には暫しの間、次へ下つて御休息、姫君には先づ入らせられませふ」

ト雪姫は思入有つて、下手へはいる。

賤機「ソレ」

ト血相變へて立上る、

白石「奥方血相かへてハテ何れへ」

賤機「ハテ知れた事、一人の姫が二人有るべき筈はなし、何れ一人は紛れ者、いでや爲止めん怪の變化」

白石「サ、お心早るは最もなれど、縁有ればこそ當家に足を止めし武之進、拙者に

に手柄を譲り玉はれ」

賤機「スリヤ其處元が見事變化を」

白石「サア腕に覺は一寸もないが、サ其處か拙者も命掛け、首尾能く變化を退治して御親子御無事の御對面、姫の御身に凶事なくば其れを手柄に當家の姫君、拙者を婚養子雪姫君を拙者のレコに」

ト小指を出す。

賤機「素性を聞いた其の上で婚に取るまい者でもない」

白石「慥ご左様か」

賤機「夫れも立派な御手の内、拜見致した上の事」

白石「夫れが何うやら便りない」

賤機「便りない身の雪姫に」

白石「便りにさせる果報者」

賤機「婚に頼むか」

白石「命を落すか」

賤機「其處が瀬戸際」

白石「此處千番の一番のかね合ひ」

賤機「慥に言葉を御誓ひ申した」

白石「其の通り」

ト唄になりて賤機上手へはいる。

「サア、事ぢや、豪い事になつて来た、首尾能く變化を退治すれば一足飛びに立身出世、當家の姫君を妻に持ち、鉦乗物の大々名、イデヤ變化が來りなば腕に覺は一寸もない、持つて産れた臆病が、飛んだ出世の妨をする、此方が手出をせぬ先きに、向うの方から尻尾を出して、逃けて呉れたなら丸儲、そんな都合に行きたいな」

ト此の時下手より白狐の雪姫、茶を持っていで來り。

雪姫「お手前一ツ召しませ」

白石「ア、雪姫殿、今日は馴れぬ野邊の徒行歩き、嘸ぞ御勞れて御座らうのふ」

雪姫「自からより貴方こそ、女の足に附合うて嘸御勞れて御座らうなア」

白石「何んの、道に馴れたる田舎武士、殊に櫻の下影を、花も恥らふ姫君、手を引合して果報者、死んでも嬉しく存じます」

雪姫「あれまあ其の様な事云ふて自らを駢るでない」

白石「何んの、誓文神かけ戀れたる雪姫殿、此方が恁んなに戀れても、思ひ鮑の片思ひ、御推察下されませう」

雪姫「其の言が定かなれば、幾千代かけて二世迄も、八重垣様の御利益で、先前始めて相見しより妾の好きな殿御振り、恁んなお方添ふなれば、百萬石も振り捨て飯も焚うし手鍋も提げる、可愛がつて下さんせ」

白石「世にも嬉しき其の御言葉、其のお心に相違なくば、身共も變らぬ二世の妻」
ト手を取りかける、尾につまづき氣をかへて、

「ヤア變化メツ」

ト切りかける、キツトしたる形になる、囃子にてドロ／＼の太鼓を薄く入れる 白石に欺されたる科にて滑稽なる振になる、宜布此の内唄になりて兩人振事有る、刀を抜き、白狐の腕へ切付ける、白狐は正體を現して上手へ障子破りて逃げ込む、後に有合せし行燈を白狐と思ひ切り伏せて、

一家の者に物申さん、中國邊の浪人白石武之進、只今變化爲止めて候方々燈明り／＼」

ト之にて賤機、始め四人の腰元雪洞を持ち、何れも帯の間の懐劍に手をかけながら出来る。

賤機「天晴れ見事な御手の内、シテ／＼變化は」

皆々「爲止められしか」

白石「只今止め……」

賤機「シテ其の變化の」

皆々「正體は」

白石「即ち之れに」

賤機「ドレ」

ト前の行燈を出す。

「こりやこれ座敷の」

皆々「有明け行燈」

白石「へ……」

賤機「矢張りお前は」

ト木頭、

「阿呆ぢやなア」

ト宜布氣味合、白石落膽して呆然たる科の内に道具一轉する。

(3) 同家奥庭の場

本舞臺樹木澤山、上手に祠、石燈籠等位置よく並べ、中央に手洗鉢に杓柄を付け、大鳥居等總て下邸奥庭雨の深夜の體、雨音に薄ドロの音を冠せて道具納る。
ト直ぐ大ドロの太鼓にて白狐の雪姫出來り、狐の正體となり、腕の傷を手洗鉢の水にて洗い、下手祠の後へ忍ぶ、花道より桐壺提燈を持ち、先きに白石後より出來り花道七三にて、

桐壺「お危のふ御座りまする」

白石「コレ〜御女中早い足ぢやなア、其う明燈りを先きへ持つて行かずに、身

共にも見せて呉れ」

桐壺「でも貴方が遅う御座りますゆへ、ツイ私が先きになりますわいなア」

白石「左様な事を申されず、緩々御歩き下され」

桐壺「其れでも早う参りませねば、此の先の祠には悪い狐や狸が居り升故、若しも欺されては成りませぬわいなア」

白石「何に其りや其の祠の當には」

桐壺「ハイ〜モウ〜私共は、何時も〜脅かされて居りますわいな、邸の者誰一人夜深には此の祠の傍へは参りませんわいな」

ト之れを聞き白石ビク〜振へながら、

白石「其れでは早く参らうでは御座らぬか」

桐壺「之れから先きは貴方様が、何卒お先きへ御越し下され」

白石「ヒツ……イヤ某は道も判らねば、勝手知れる貴下が御先きへ御案内下され」

桐壺 「イエ〜道は一筋サア〜お先へ」

ト入れ代らんとするを白石は、いるまいとする塗炭に提燈の火は消える。

白石 「ヤア提燈の明りが」

桐壺 「私は之れで御免を蒙ります」

ト白石の止めるを振り切りて、元の處へ走つて這入る、白石は之れより種々滑稽なる怪き科有つて、ト本舞臺へ來りて決心なしたる科にて帶刀を引抜き八方を切り廻る事有る、白狐はいで來りてよろしく白石を繰る、白石夢中になつて石燈籠或は手洗鉢の家根の柱等を目標として狂ひ居る時、雨音烈しくなり、上手より仲間新平二引の淺黄の伴天バツチヨ笠を冠り、手に一升徳利を提げていで來り、白石と突き當る、白石矢庭に切り付ける、之れより新平と色々滑稽の立廻り有る、此の中へ白狐は時々隙を見て割つて入り、ト白石の刀を取り、代に杓柄を持たせ、新平は一升徳利を持つて杓柄で切りに來る白石と立廻りよろしく、ト新平の脇腹を突く、塗炭に新平は一升

徳利を横にする、中より酒がこぼれるを白石は手にて受け。

白石 「變化は慥に」

ト木頭、

「爲止たり……」

ト之れにて宜布、面白味に新平苦しむ體。

滿 來

若
き
日
の
影

【二場】

た模様の襖の出入口、其の上手に唐木の茶棚を備へ付け、茶道具水差し銀瓶置時計等を位置よく置く事、下手は鼠壁に花菱紋付の箱提燈箱を五個、本物にてかけ有る下手正面入口庇付き櫺子格子、其の向ふは町家の遠見の背景、中央座敷は机、其の上へ卓上電話、硝子の筆立て、雑誌等を置き、火鉢、座蒲團、呼鈴等總て中流の小奇麗なる家庭の飾り、宜しく賑かなる噺子にて幕明く。

ト下手入口の前に荷車の上は本箱、火鉢、下駄箱、米びつ、夜具、バケツ、雨傘、火鉢等凡て引越様の諸道具を澤山乗せて、仲士二人は車より降りて交る代る中へ運び居る、野田夫婦は其れを受取りて小林喜兵衛の手に渡す、夫れを民子は受取りて二階へ居る藤井正夫に渡すよろしく家移の道具を各自運ぶ手傳人の心、全部運び終ると噺子止まる、此の内藤井正夫二階より降り來り、

正夫「イヤ〜御苦勞〜、モウ之れで仕舞だね……」

民子「ハイ大抵片附きました様ですわネへ」

正夫「イヤ有り難い、〜サア皆此方へ來て一ぶくやつて呉れ玉へ」

ト之れにて野田、お政、喜兵衛捨ぜりふにて好き處へ座す、内民子は仲士二人に祝儀をやる。

仲士甲「へい〜有り難う御座います」

同乙「澤山に御祝儀を頂きました」

ト禮を言ひツ、車の後仕舞をして下手へはいる。

明「併し藤井君、好い二階が見付かつたなア」

正夫「全く小村君の骨折りだよ」

小村「へい〜自慢ぢやおまへんが、一軒なら兎も角も二階借りで可なり奇麗な内で、然うして氣兼ねない處言ふ藤井さんの御註文で、一寸苦しみました、此の二階ならマア〜言分がおまへんな」

正夫「全く感謝するの外はないよ、家内も大喜びだよ」

民子「夫れに此の内の御夫婦が好いお人らしいので、何よりですわ」

お政「此方の下の人は何にをする人だすいな」

小村「其れは本町の金物屋で辻村さん言ふて可成り手廣ふやつて居られる商人で、今度お娘御の御養子で新太郎さんという若旦那が出来てから、若夫婦の中に年よりが居るのは何方らか氣兼をする言ふて、此處へ隠居なされましてなア、其れはくゝ氣の置けぬお人で、老人二人の住居には勿體ない、誰れぞ好い人が有れば二階だけ貸して上げて宜い私が聞た地獄耳で、直ぐ藤井さんへ知らしめたのぢや」

明「其れは香氣だね、老夫婦二人切りは氣が置けなくつて何によりだ、藤井君夫婦も来た日にや誰れの前だつて構ますに猛烈に圓滿振りを見せるのだから、若い貸主だつたら直ぐ氣を悪くして斷られるよ」

正夫「所がね、君此の下の老夫婦も年寄りの癖に若い者も遠く及ばぬといふ圓滿

振りで、流石の我輩もあきれたよ」

明「チャ／＼幾つだい、此の下の内の人は」

小村「へい御隠居が六十四五、御家はんが五十二三かいな」

明「チャ／＼夫れで圓滿振りを發揮するかね」

正夫「其うなんだよ、残る花香言ふ年ぢやなし、六十越して圓滿過ぎるのだから、一寸見た目は可笑しいよ」

明「こいつは類を以て集るだね」

お政「貴方其んな事を大きな聲で、聞へるご悪るうおますがな」

民子「イエ大丈夫、只今御夫婦共御出かけになつて留守を願まれて居るのですのよ」

お政「マア／＼今日始めて来た二階借りの人に留守を願んで出掛けるは、随分香氣なお人だすなア」

小村「其處が矢張り辻村はんの御隠居はんだだけで、大優な者ですわいなア、一寸二階借りで此んな内はおまへんわいなア」

正夫「之れも皆君の御蔭だ、其處で一寸一杯心祝ひも仕たいのだが、未だ片附かないし、殊に恚うして留守を頼まれて居るので有るから、誠に勝手ながら十圓散財するから、野田御夫婦が主人役で、小村さんを招待して何處か其處等の西洋料理屋へでも案内して、一ト口呑んで呉れたまへ」

ト紙入より拾圓札を出して渡す。

明「イ、ヨ、く其んな心配は無用だよ、同じ會社に勤めて居る親友の好みで手傳に來たのだ、そんな事は止し玉へ」

小村「モシ野田さん、折角出してはりまんねやがな、貴方は宜しいやらふけご私後は後で一杯呑まして貰ふのが樂みで働いて居りますのやがな、主腹よふて下衆腹知らずやなア……」

正夫「全くだ、甚だ失敬だが之れで一杯呑んで呉れ玉へ、我々夫婦が行けないのだからね、君が代表者として小村君に一杯上げて呉れ玉へ」

明「夫れでは餘り心苦しいねへ」

小村「宜しい、私が預りまして御二人を招待しませう」

ト正夫より拾圓札を取つて、

「サア野田さん一所に参りませう」

明「其れはく御馳走様だね……」

お政「貴方御禮は藤井さんに仰在いよ」

民子「アラ奥様宜しう御座い升よ」

ト小村は立上つて、

小村「サア参りませう、藤井さん大きに」

明「夫れぢや君、失敬するよ」

若き日の影

正夫 「誠に御苦勞でしたねへ」

お政 「イエごう致しまして」

民子 「チト何卒御遊びにねへ」

明 「ハイ有り難う」

トガヤ／＼捨ぜりふにて、小村先きに野田夫婦表へ出る。

小村 「サア一杯呑みに行きませうか」

川 「チイ小村君何處へ行くのだへ」

小村 「マア黙つて附いておいでなはれな」

お政 「小村はん人の禪で氣が大きいなア」

小村 「之れが私の本音だすがな」

三人 「アハ、ハ、ハ、」

ト笑ひになり三人は下手へはいる、同時に揚幕よりおかつ上品なる老けたる拵へにて

稽古本と撥とを包みし風呂敷包を抱へて出來り、直ぐ内へはいり、

おかつ 「只今……」

正夫 「チ、お歸り」

民子 「大變お早ふ御座りましたなア」

おかつ 「イエ此の年に成つて長唄の稽古通ひでもおまへんけれぎ、亭主の好きな赤烏

帽子で、内の人に勧められて通ふて居ますのや、一寸晩酌に一杯呑むのに私が傍

で爪弾きは一寸乙なものですわいな」

正夫 「イヨ——歸り早々又御惚けですかな」

おかつ 「ホ、堪忍しておくれなれや、惚れた弱身でなア」

正夫 「チイ民子、此方へ寄つていよ、之れぢや二階の我々より下の老夫婦の方

が猛烈だよ」

民子 「全くですなえ、チホホ、」

おかつ「チ、恥かしやのふ、アノ内のは何處ぞへ参りましたかいなア」

民子「ハイ先程風呂へ行くに仰在いまして、我々が留守を頼まれ居ります」

おかつ「其れは、〴〵今日始めて二階を御借し申した貴下方に留守番を頼むなんて呑氣な人やわいなア」

正夫「其れで我々も二階へ上らず、斯ふして下に居りて升のですよ」

おかつ「其れは本まに濟みまへん、好いお方に二階を借りて貰ふて内も喜んで居りますし、留守番はして貰らへるし、萬一泥棒が這入つても用心はよし、何卒何時迄も居てゝおくなはれや、實は用心が悪いので犬でも飼はふかと思ふて居りました」

正夫「丸で番犬に飼はれた形だね」

おかつ「何卒之れから御心安う」

正夫「ワンノ」

ト犬の泣き聲をする。

民子「貴方、失禮な事を仰在いますな」

おかつ「イエ、心の置けぬお方で、内も喜んで居りますので御座ります」

民子「何卒此方にも御心安ふ御願ひ申します」

おかつ「さうしてお荷物は皆片附きましたのだすかいな」

正夫「エ、友達が手傳に來て呉れまして、今の先き片付いて皆歸つて仕まひました」

おかつ「其れはマア、御草臥で御座りませう、なア奥さん」

民子「ハイ矢張り何んだか氣がイソ、致しましてねえ、手も顔も眞黒になりましたのよ」

正夫「今の間に風呂へ行つて來ようか」

おかつ「其れがよろしいわ、此の横町だす一ト風呂這入つておいでなされ、そうして内のに早ふ歸れと言ふまじくなはれ」

正夫「ハイ、其では民子一所に行かうか」

民子「エ、一寸行つて参ります」

おかつ「マア、御風呂御一所だすか」

正夫「エ、僕の家庭は何處へ行くのも二人連れです」

おかつ「へーエなかく御圓滿ですなア」

正夫「之れから一番下まで上まで競争しませうか」

おかつ「へエ、其れなら滅多に負けやしまへんわいなア」

民子「之れは面白ふ御座いますわねえ、ホ、一寸石鹼を取つて参ります」

ト民子は二階へ上がる。

おかつ「ナア藤井さんレコは」

ト小指を出して、

「貴方に餘ッ程惚れて居はりますなア」

正夫「そんな事はおますまい、僕の方があれに惚れて居るのですもの」

おかつ「イ、エ奥様の方が大分にめんでれですわいなア、外の事は判りまへんが此の道丈は一ト目見たら滅多に間違はおまへん、昔から其の道で苦勞した婆だツさかいにな」

ト此の時一寸之れを聞いて居たる民子は、石鹼と手拭を持つて二階の段梯子より聞いて居て、突然に、

民子「全く私の方が惚れて居ますのよ」

ト大きな聲で言ふ。

おかつ「ア、吃驚した、聞いてなはつたのかいなア、てれくさやのふ」

民子「だつて其れに違ひなるのですもの、ネエ貴方……」

ト正夫に縋り付く、

正夫「僕だつて命限り惚れてるのよ」

民子「ちや會惚れねへ」

おかつ「モウく早く御風呂へ行ておいでやす」

正夫「イヤ失敬く」

ト民子の手を取つて行きかける。

おかつ「マアく手引ひててれくさやのふ」

民子「デモ習慣ですものねへ貴方」

正夫「全くだ、お婆さん御免なさい」

おかつ「内の人に早ふ歸る様に言ふさくなはれや」

ト焦れる様に言ふ。

正夫「ハイ承知いたしました」

ト唄になり陸じく表へ出る、おかつ羨やましきふに見て居る、兩人は下手へはいる、揚幕よりお千代丸鬚の奥様風にて泣きながらいで来る、後よりうどんや若衆太吉岡持

を提げて附いて出る、其の後より辻村新太郎商人の若主人の拵へにて腕を組みながら出来る、花道七三にて、

お千代「サアお母さんに聞いて貰ひますせ」

太吉「何にを聞いて貰らひなはるのや」

お千代「貴方なんや」

太吉「私いうごんやの出前持ちだすがな」

お千代「其の出前持が何の用があつて附いて歩いてなはるのや」

太吉「別に何んの用もおまへんけれご、奥様ねシクく泣いてなはるし、旦那は腕組して積らん顔して後から附いて歩いてなはるよつて、ハアン之れは夫婦喧嘩やなご思ふご、えらい面白なつて来て、ごないないなご思ふて附いて歩いて

いますのや」

お千代「馬鹿にしなはん、人の夫婦喧嘩が面白いごは、何にが面白いのやいな」

太吉 「へエ其の顔が面白いのでなア」

お千代 「何をぬかしやがるのじやい」

ト新太郎に向ひ、

「モシ貴方、ゲラ／＼笑ふて何にを眺めてなはるのや、此んな者に此んな事を言はれて居るのに、現在の亭主が知らん顔して眺めて居るこはよふマア／＼其處迄水臭さい氣になりなはつたなア」

新太郎 「別に水臭いも辛いもないが馬鹿らしいて口が出せぬわい、見ず知らずのうさんやの若い者に黽られて居るのぢやないか、君ヒステリーから相手になつて呉れな」

太吉 「マア／＼大抵やおまへんな」

お千代 「何が大抵やおまへんのや、何方が悪いかマア聞さくなはれ實は……」

ト言ひかける、新太郎は冠せかけて、

新太郎 「馬鹿ツ、知らぬ方に何を言ふのだ、君も早く往來し玉へ」

ト之れにて又唄になる、太吉は先きになり三人共舞本臺へ居直る。

お千代 「サア貴下先きへはいりなはれ」

新太郎 「モウお千代大抵にしたらごうだ、折角斯ふして隠居して居られる御兩親の耳へ下らぬここをきかすのは、第一親不孝だよ、僕が悪るけりや謝まるからモウ歸ろ／＼」

ト言ひツ、花道へ行きかける。お千代は其の袖を捕へて、

お千代 「お父さんやお母さんの前で、言譯けが無いと思ふて貴方逃ける積りやなア今日はそんな手には載りまへんで」

新太郎 「馬鹿な真似をするな、コレうさんやが笑らつて居るじやないか」

お千代 「うさんやはん、貴方ゲラ／＼笑ふてる手間で此の内へ這入つて一寸お母さんに表まで来さくなはれ言ふさくなはれ」

太吉「へエ——」

ト内へはいり、

「お母はん、表迄出てんか」

おかつ「ア、吃驚した、何んやいな内はうごんは注文せんつもりがな」

太吉「イ、エ御注文違ひます、夫婦喧嘩を送つて來ましたので」

おかつ「夫婦喧嘩は何んじやいなア」

太吉「へイ只今現品御目に掛けます」

ト表へ出てうどんの箱の中へ置き、

太吉「サアおはいり〜」

お千代「サア〜這入りなはれ、〜」
ト嫌がる新太郎の手を取つて引張る、後より太吉は新太郎を押し入れる、新太郎ツカツカと中へはいり、おかつと顔見合せて氣味合、

新太郎「お母さん、今日は」

おかつ「テ、新太郎か」

トお千代は突然、

千代「ワア——」

ト大声を上げて泣伏す、新太郎氣まづき科にて俯向く、太吉は泣くお千代の肩を摩でながら、

太吉「マア〜泣いても仕方が無い、兎に角お母さんの御心も聞いた上で、何んこか話もつけますわいな」

おかつ「マア〜何處のお方が存じませぬが、御親切に有り難う御座ります、モウ仲が宜過ぎてツイ〜斯んな夫婦喧嘩も致しますので、お恥しい事で御座ります
そうして貴方は何方様の御方で」

お千代「お母さん此の人はうごんやの出前持ちやがな……」

おかつ 「ハアン内へうぎんを持つて来たのかいな」
太吉 「イエ違ひます」

トラどんを見て、

「ア、さめてしもふたがな、御免ん」

ト慌て、下手へうどんを持つてはいる。

おかつ 「阿呆かいなあの人、お前方もうぎんやの出前持に仲裁たのむなんて、惚けているな」

新太郎 「イエ別に仲裁を頼んだ譯ぢやないのです、お千代が往來で下だらん事を言ひますので、今の男が面白半分に附いて来たのです、實にお恥しい事です」

お千代 「その恥しい事を誰がそしはつたのや、コレよふ聞きなはれや」
おかつ 「コレお千代静にしなはれ、夫婦喧嘩を隠居まで持つて来るさういふ事が有るかいな」

新太郎 「イエ分家迄只今此の喧嘩を持つて行たのですが、伯父さんが神戸へ御越になつて不在ですから、此方へ廻送して来たのです」

おかつ 「夫婦喧嘩を廣告に歩いて居るのかいなア、マア、何の喧嘩か知らんけご此の新太郎はお前が好きで貰ふた養子やないか、好いた同士の若夫婦の中へ、我が一所に居ては氣が詰らうと粹を利かしてお父さんが此處へ隠居しておるのやないか、左すれば少々氣に入らぬ事が有つても、お前も親への遠慮で喧嘩の出来る義理やないやないか、おまけに此處迄喧嘩を持ち込むなんてツ、餘んまり氣儘すぎるわいなア」

新太郎 「イエお母アさん、全く濟みません、皆私が行届かぬからです、コレお千代私が悪るかつたから何にも言はずに歸つて呉れい」

お千代 「悪るかつたご謝りなはるからは、矢張りお竹ぎんご關係がおますのやな」
新太郎 「馬鹿な事を言ふて呉れな、あんな山出しの飯焚きご何の關係が有るものか

宜い加減にして置きいな」

おかつ 「飯焚のお竹がごうしたのやいな」

お千代 「聞いごくなはれ、斯う言ふ譯で」

新太郎 「コレ馬鹿な事を言ふなア」

お千代 「貴方黙つてなはれ、エ、此方へよつて居なはれ」

ト新太郎の手を取つて下手へ突遣る、塗炭儀兵衛老人の風呂戻りの拵へにて下手よりいで來り、表口にて中の様子聞いて居る。

「實はな今日も内で牡丹餅を拵へてお父さんお母はんごに持つて來る積りであのお竹に言附けて拵へて居るご、此の人が傍へ出て來て忙しいのに御苦勞やなごお竹に言ひますのやがな、するごお竹の奴が、イ、エ私が拵へた牡丹餅が若旦那に喰べて貰らへば本望だすご、ヂット顔を見て嬉しそうに笑ひますのやがな、なんほなんでも私の前で其んな事を見せられては、こ

らへて居られますか」

おかつ 「其りやお竹やめて生きて居るのぢやもの、笑ひもせいでかいな」

お千代 「イエ其の笑ひ様に意味がおます、なんぞ特別の關係がなければ見られぬ一種不思議の笑ひ顔です、此の人もにつご笑ひますのやがな」

新太郎 「其れがお前の誤解だよ、お竹の顔は鍋蓋に目鼻こいふあの顔で、此の頃は白粉なんか塗つて居るから可笑いので、僕も笑つたのだよ」

お千代 「可笑しいのやおますまい、嬉れしいからだすやろ、其の證據に私が牡丹餅を投けた時に、何んで謝りなはつたのや」

おかつ 「お前が牡丹餅を投けたのかいなア」

お千代 「餘んまり口惜しいよつて、此の顔に投けましたら自分が悪いと思ふて謝つたのが何よりの證據だす」

新太郎 「夫婦で有りながら、女房に謝る必要は更に無いが、夫婦喧嘩でも仕て居る

處を店の者にでも見られたら宜い笑者ぢやから、蟲を殺して謝まつたのだ」

おかつ 「大きに〜其れが矢張り新さんにして見るに、養子に來た言ふ遠慮からぢやわいな」

お千代 「夫婦の中にそんな遠慮が有りますか、氣に入らぬ事が有つたらボント殿りなはれ」

ト此の時儀兵衛ヌート這入り來り、

儀兵衛 「ガント殿つてやれ」

新太郎 「チ、お父さん」

おかつ 「お歸り」

ト嬉しそうに若夫婦氣取りで手拭等を取りて座蒲團を敷きいそぐとして、

「マア、内の人遅ふおましたなア」

儀兵衛 「先前から歸つて表で聞いて居るのぢや、わい何ぜお千代を叱らんのぢや

い

お千代 「おまつさん、何んで私が叱られますのや」

儀兵衛 「ぬかすない、下氣儘者め、之れ丈け立派な養子を常から尻に敷きやがつてな、大事にした上大事にしても世間ではあれは養子ぢや言はれるのぢや、之れだけの男が貴様の様な下氣儘者の養子になつて呉れたのは、辻村の家の大誇ぢや朝晩神棚へでも祭つて拜がんでおけ」

お千代 「サア大事なく、婚はんやよつて嫉妬もしますのやがな」

儀兵衛 「コリヤ亭主の顔へ牡丹餅を投げつける嫉妬が有るかへ、其れが亭主の顔を汚す言ふこのぢやい、又新太郎もそんな事をさらしたら、ガンミ殿り附けてやれ」

おかつ 「其れが矢張り新ヤンも養子やと思よつてになア」

儀兵衛 「養子やつたら其の様に弱い者のかい、俺もお前の處へ養子に來たのぢやな

いか、随分若い時には浮氣もしたが、其の度毎にお前が膨れ面をするミボンニ殿
つたら、何時もお前は両手をついて謝つたぢやないか」

おかつ 「其れは私いが貴方に惚れてましたがな」

儀兵衛 「當り前ぢやへ、惚れて居ると思へばこそ、此の年迄連れ添ふて來たのやな
いかい」

おかつ 「其れは其ふだすは、邪慳にしられれば、しられるほど好になつてなア」

儀兵衛 「俺も矢張お前の其の優しい心を察して、ア、可愛い奴ぢやなあと思ふてな
ア」

おかつ 「旦那はんほんまかいな」

儀兵衛 「まだ俺の心が判らぬのかい」

おかつ 「マア其の口前に欺されて、罪な人やわ……」
ト捻ねる。

儀兵衛 「エ、何にをするのぢやへ、彼奴等が見て居るわい」

ト此の様子をお千代、新太郎は美やましげに見てゐる。

新太郎 「イエ何卒御遠慮なく」

おかつ 「チ、てれくさやのふ、新さん笑ふてなや、惚れた弱身やわいなア」

新太郎 「ア、お羨やましい事ですな」

儀兵衛 「何に羨やましい事が有るかい、嫁は此の位に惚れさへねばあかんわい、
第一お千代の惚れ様が足らんわい」

お千代 「お父さん、私此の上惚れたら命がないわ」

儀兵衛 「命がけで惚れてる婚に牡丹餅投げる奴が有るかい、又新太郎もそんな事
さらしたら黙つて暇をやる言ふて内を出て行かぬかい」

お千代 「お父さん、仕様も無い事を教へておくんはなんないなア」

おかつ 「イエ千代チャン、私も若時分に其れで何遍泣いたか判らんのやわ、直ぐ

出て行くと言ふのやもの、ほんまに憎らしい人やつたは」

儀兵衛 「其の時は何時も泣いて止めたなア」

おかつ 「其ら惚れた方が弱いわいなア」

ト此の時新太郎無言で立上る、お千代は其袖を捕らへて、

お千代 「貴方何處へ行きなはるのや」

新太郎 「都合でお前に暇をやる、モウ歸らない」

儀兵衛 「えらい其の意氣、々々」

お千代 「お父さん其んな事言はずに止めておくれなはれいな」

おかつ 「新チャンも腹が立つやうが、今日は堪忍してやつまくなはれいなア」

新太郎 「お父さん、其の後はさう行きますね」

儀兵衛 「其んな事を聞かない、ナゼ亭主に投げ打ち仕たごボンと蹴らんかへ」

新太郎 「なぜ亭主に投げ打ち仕たのだ」

ト振りはらいボンと蹴る、お千代はあきれてヂツト睨める。

おかつ 「新チャンそんな手荒な事をせいで……」

儀兵衛 「仕たがさうしたい、口出しするない」

トおかつをポント蹴る。

おかつ 「アレ私を蹴りなはつたなア」

儀兵衛 「亭主が女房を蹴つて悪いかい、可愛けりやこそ蹴りもするのぢやい」

おかつ 「チャ嬉しいやのふ、千代チャン、貴方も嬉れしいやろ」

お千代 「エ、好きな人に蹴られたり叩かれたりする時は、何んこも言へぬ嬉しさだ

すなア」

儀兵衛 「其の位る大事な男なら悪るかつたご謝まれ」

おかつ 「悪るおました堪忍しやア」

儀兵衛 「コレ新太郎此の調子でやれ」

新太郎 「へい……其の位る大事な男なら悪るかつたご謝れ」

お千代 「悪るおました堪忍してやア……」

儀兵衛 「之れから窘め」

おかつ 「ハイ……」

新太郎 「之れから窘め」

お千代 「ハイ……」

儀兵衛 「縁有つて夫婦になつたのぢやもの」

新太郎 「縁有つて夫婦になつたのぢやもの」

儀兵衛 「別れられる中ぢやなし」

新太郎 「別れられる中ぢやなし」

儀兵衛 「可愛がられて暮すのが女の徳ぢやい」

新太郎 「可愛がられて暮すのが女の徳ぢやい」

儀兵衛 「判つたかい」

新太郎 「判つたかい」

おかつ 「ハイ……」

お千代 「ハイ」

儀兵衛 「サア酒でもつけてくれ」

おかつ 「ハイ」

新太郎 「サア酒でもつけてくれ」

お千代 「ハイ」

儀兵衛 「新太郎お前は酒が嫌いぢやないかい」

新太郎 「ア、そうでした、ハ、ハ、ハ、早ふ牡丹餅でも喰はせよ」

お千代 「早ふ内へ歸つて喰ませふなア」

おかつ 「ナア旦那はん、同じ事でも中直りは一寸一杯言ふのこ、牡丹餅を喰ふは

可笑いなア

儀兵衛 「實際牡丹餅では色氣が無いなア」

お千代 「大きに憚りさん、へん貴下方ならなあ」

新太郎 「全くだよ、斯んな事は親でも判らないからねえ」

お千代 「若旦那那歸りましよいなア……」

ト睦しくする様を見せる、おかつ羨やましそらに睨める、

儀兵衛 「何に見惚れてるのぢやい、此方を向ひて」

おかつ 「デモ餘んまり仲が好いよつてなア」

儀兵衛 「此方も負けるかい、チイお前等早ふ歸れい」

新太郎 「ハイ誠に御邪魔致しました、其れぢやお千代歸へらふ」

お千代 「ハイ左様なら」

おかつ 「之れから新チャンを大事にするのやで」

お千代 「其りや頼まれいでも大事の人だすもの」

ト新太郎にしなだれるように、

「ナア……貴方た」

新太郎 「全くだ、お父さん色々有り難う御座いました……」

儀兵衛 「之れから仲好にして私等夫婦を見習ふのぢやぜ」

新太郎 「ハイ家庭圓滿のサンプルにして、之れから御両親を手本に致します、左様なら」

ト二人は立上る。

おかつ 「千代チャン、牡丹餅が出来たら少しお母アチャンに持たして来てやア……」

お千代 「ハイ、出来たら又二人で持つて来るわいなア」

ト此の聲新太郎は表口へ出て空を見て、

新太郎 「ア、一寸空が曇つて来たよ、早ふ歸うく」

若き日の影

お千代 「チャそりや、大變ですなア」

おかつ 「傘を持って行たらさうやいな」

お千代 「イエ近いから大丈夫だすナア、あんた」

新太郎 「そうさもなく、濡た處が二人で濡れるのだ、構ふもんかい」

お千代 「お父さん嬉しいわ」

ト新太郎に縫る。

儀兵衛 「おかつ、親つかまいて惚氣よるがなア」

ト片袖濡れもりんきすなの流り唄になりお千代新太郎は陸じく花道へ這入る。おかつは見送りて元へ戻り、

おかつ 「ナア旦那はん、我が子ながら羨やましい様な好い夫婦だすなア」

儀兵衛 「何が羨しい事があるものかい、お前も私も好い夫婦ぢやがな」

おかつ 「其れでも貴方は頭は禿けて來たし、私も白毛になつてくるし、モウ一遍あ

の年になりなア」

儀兵衛 「そんな無理を言ふない、假ひ禿頭も白毛でも心は何時も若いと思ふてりや宜いぢやないかい、お前も成る丈け奇麗にしてくれいよ」

おかつ 「成程氣で氣を養ふとは、其れでは一寸今の間に風呂へ行つて來ますは」

儀兵衛 「チ、そふせい〜」

おかつ 「貴方私いが歸るまで、御飯待つてさくなはれや」

儀兵衛 「待てる共〜一人で呑んで甘いかい」

おかつ 「私いかてさうだんがな」

ト言ひつゝ石鹼手拭金盥を持ち表へ出かける、儀兵衛は鏡臺の上の白粉瓶を取つて、

儀兵衛 「チ白粉瓶が忘れてあるぞ」

おかつ 「イエ内へ歸つてからつけますわ、此の年で風呂屋でつけたら人が笑ひますがな」

儀兵衛 「人が見よふが笑はふが構ふ事があるかい、亭主の俺が其れが好きなら宜いぢやないかい」

おかつ 「成程人に見せるやなし、貴方の爲に塗る白粉他人に氣象はおまへんな」

儀兵衛 「當り前ぢやい、今日は何時もより白ふ塗つて来いよ、お前が塗るのミ素願

三年の十も違ふがな」

おかつ 「貴方笑ひなはれへんか」

儀兵衛 「阿呆らしい、白粉を塗つて呉れたら、昔のお前を思ひ出すがな」

おかつ 「チホ、てれくさいやのふ」

ト儀兵衛の膝へ纏る途端、藤井正夫妻民子歸り来リツカくと内へはいる。

正夫 「只今……」

トこれにておかつ儀兵衛は別れる、氣味合の唄になり、

儀兵衛 「チ、お歸り」

正夫 「悪い處へ歸つたのじや有りませんか」

おかつ 「イエゴう致しまして」

ト相方互に極り悪き科にて正夫と民子は目で知しながら捨ぜりふにて二階へ上る、此の時おかつは表へ出る、唄になりて雨音を聞かす。

おかつ 「一寸申し降つて来ましたわ」

儀兵衛 「ヨシ、サア傘を持つて行け」

ト渡す、誂への囃子になり、おかつは傘をさして下手へ這入る、ト同時に夕立の雨音になり男女大ぜいの通行人、夕立に逢ひたる體にて花道及び下手より走り出で好きな處へ皆々這入る、老けたる花の師匠吉田さん下手より手に花を持つていで來り儀兵衛の内の軒下で雨宿りをなす、入口を少し開けて内へ這入らんとする、此の音に氣附き。

儀兵衛 「何方……」

おきん 「ハイ俄雨に逢ひまして一寸門先を拜借して居ります者で、暫らく休まし

若き日の影

て下さりませ」

儀兵衛 「チ、左様か、氣の毒な通り雨ぢやで、直ぐ揚りますわいなア、マア〜此方へ御上り」

おきん 「ハイ〜有難う御座ります」

ト儀兵衛は立上りて傍へ行きながら、

儀兵衛 「マア〜其處では濡れますわい、此方へ上りなされ〜」

おきん 「イエノ〜其れでは恐入ります」

儀兵衛 「同じ事ぢやがな、サアノ〜お上り〜」

おきん 「ハイ〜其れでは一寸足袋丈けぬがさして貰います」

ト意氣な唄になり、おきんは上へあがりて足袋をぬぐ、其の姿を儀兵衛は見て、

儀兵衛 「ハアン、お花の御師匠さんらしいなア」

おきん 「左様で御座ります、稽古戻りにえらい目に逢ひました、お陰様で助すから

まのした」

ト言ふ顔を儀兵衛はツク〜見て、

儀兵衛 「モシ間違ましたら御免じやが、モシヤ貴方の御産れは京都に違ひますか」

おきん 「ハイ左様で御座りますが、よふ御存じで

儀兵衛 「へエ——京都は建仁寺町あたりで暮しなかつた事は御座りませんか」

おきん 「ハイ建仁寺町の松原で紙屋をして居ました吉田に申す」

儀兵衛 「ヒエ——そんなら吉田の娘さんのおきんさんか……」

おきん 「へエ……あんたは」

儀兵衛 「私しは山本の息子ぢやがな」

おきん 「へエ——山本の息子に儀兵衛はんですかいな」

儀兵衛 「チ、おきんか……」

おきん 「儀兵衛はんか……」

儀兵衛 「マア……」

おきん 「マア……」

二人 「御機嫌よろしう」

ト互にあきれたる科……

儀兵衛 「サアマア……此方へお出でく、

おきん 「丸て夢の様だんなア、命が有れば逢へますものやなア」

儀兵衛 「サア……お互に永生きせねばならぬものぢや、初めて顔見た時にハテナミ

思ふたのやがなア」

おきん 「サア私いもなア貴方の聲を聞いた時に、ア、十八の初戀の儀兵衛さんの聲

に其儘、ハット思ふて顔見ましたのやがな、黠だらけの爺さん、昔の儀兵衛は意

氣な男やつたミ、昔の貴方を思ひ出したら丸で違ひますがな、其れでもヨモヤミ

思ひまして」

儀兵衛 「何にも私丈け老けた譯ぢやなし、お前さんも昔の桃割れ頭に友禪の着物が

似合ふた人、斯ふなつたミは思はんがな」

おきん 「其りや貴方五十七ですがな」

儀兵衛 「マア左様か私は六十一ぢやがな」

おきん 「成程なア、私が十七、貴方が廿一、五ツ違ひやつたなア」

儀兵衛 「其ふやつたかいなア、今でも矢張り五ツ違ひぢやがな」

おきん 「忘れてなはるのかいな、水臭い私此の年になるまで忘れしまへん、十七の

年の十月廿二日の晩丈けは毎年思ひ出して寝た事はおまへんで」

儀兵衛 「十月の廿二日の晩ミ言ふミ」

おきん 「水臭い貴方ミ駈落して舞子の龜屋で親類に捕まへられた晩だんがな」

儀兵衛 「ハアン、あれは十月の廿二日やつたかいな」

おきん 「男はんミ言ふものは、皆んな其んな氣かいなア」

儀兵衛 「イヤ決して忘れた言ふ事は無いが、モウ嫁入先きの極めて有る、お前を連れて逃げたのぢや、若い時には無分別をやるものぢやなア、あれからぎふしなはつた」

おきん 「何うも斯ふもおますかいな、私程積らん一代を暮した者はおまへん、無理から彼處へ嫁にやられて、泣き／＼其の人を添ひましたがなア」

儀兵衛 「其れは／＼お樂みな事で御座ります」

おきん 「宜ふ其んな事が言へますなア」

トデット傍へ寄る。

儀兵衛 「コレ／＼婚はんの有る人が餘んまり傍へ寄りなはんな」

おきん 「阿呆らしい、八年前に死に別れましたがな」

儀兵衛 「ハン其れは／＼デハ今では後家はんか」

おきん 「當り前だんがな、お蔭で悴が此の大阪へ来て可成の商賣を仕て居ますので

京都から私も引取られ遊び半分生花の師匠、今は浮世も戀も忘れて居ますのやに斯うして貴方に逢つて見るに矢張り昔を思ひ出しますがな、其ふして貴方は其後どうしなはつたのや」

儀兵衛 「サア私もあれから縁有つて、此の大阪の唐物町の金物屋で辻村言ふ内へ養子に貰はれて、今では苗字も辻村儀兵衛言ふのぢやがな」

おきん 「へーんそうして其の娘は」

儀兵衛 「娘はんの事があるかいなア」お前ご一ツ下の五十六になつて居る婆あぢやがな」

おきん 「へエン未だ御達者ですの」

儀兵衛 「達者共／＼今風呂へ行きよつたのぢや」

トおきんは無言にて立ち上る。

「コレ何處へ行きなさるのぢや」

若き日の影

おきん 「デモ奥様が歸つて見へては濟みまへん、モシ嫉妬でもやかれたらなア」

儀兵衛 「モウ其んな年ぢやないわい、ヨシヤ歸つて來ても知らぬ顔で、雨宿りで昔馴染言へば宜いぢやないかへ」

おきん 「其れもそうだんな、お互に此の年ぢやもの、色も戀もおまへんわな、其うして此處に二人暮しですのう」

儀兵衛 「娘に養子をしてなア、婆アミ此處で隠居して居ますのぢや」

おきん 「マア、水入らずの差向ひでお羨やましい事わいな、矢張り歸りますわ」
ト立ちかける。

儀兵衛 「何ぜ」

おきん 「デモ今にも奥様が歸りはつて、仲の好い處見せられては、此の年になつても宜い氣持は仕まへんわいなア、雀百迄踊りの假令でなア……」

儀兵衛 「マアそんな皮肉な事言はずに、モウ暫らく遊びなされ、未だ聞き度い事も

有るわいな」

おきん 「其んな事を聞いたら、又煩惱が起りますわいなア」

ト立上る其の手を儀兵衛はデット取つて、

儀兵衛 「コレえらい水臭い女子になつたなア」

おきん 「斯んな女子に誰れが仕なはつたのやいな」

トおきんは儀兵衛に縫がる塗炭、料理屋の出前持與八、二三種の小鉢物を入れて持來り、入口を開けて大聲にて、

與八 「へいお誂へを持つて參りました」

ト此の聲にて儀兵衛とおきんは吃驚して飛び退く、與八は此の體を見てニヤク笑ひながら見て居る。

儀兵衛 「コレ、間違ひやないか」

與八 「イエ辻村の御隠居ご聞いて參りました」

若き日の影

儀兵衛 「ハア其れでは家内が言ふたのぢやなア、其れにしても出前持なら其處へ置いて歸つたら宜いぢやないかい」

奥八 「へエデモ御近所で評判の仲の好い御隠居ご聞いてますので、一遍お顔を拜見さして貰ふご思ひましてなア」

儀兵衛 「何にをぬかすのかい、早ふ歸れ」

奥八 「へ——成る程、此方が評判の奥様だんな」

おきん 「阿呆らしい、御門が違ひますせ」

奥八 「何んの彼んの一寸嫉妬喧嘩の後だんな」

儀兵衛 「ヤイ早ふ歸れ、黠たらいかれるぞ」

ト意氣込む奥八一寸驚いて、

奥八 「へエ——」

ト表口へ出る、唄になり同時におかつ湯歸りの體にて白粉稍々濃く塗りて下手より

で来る、奥八は入口より内を一生懸命に覗き居る、之れをおかつは見て、

おかつ 「お前はん何にを覗いて居るのや」

奥八 「エイ〜」

ト制しながら、

「八釜敷い言はんご見て見なはれ、此處が評判の辻村の隠居だすせ」

おかつ 「其の辻村の隠居家が何が評判やね」

奥八 「此の近所の噂を知りなはれんのか、此處のお爺ごお婆が若い者の様に朝から晩までイチヤ〜するので、えらい評判だすかなア」

おかつ 「年寄つたらイチヤ〜出来まへんか」

奥八 「出来ん事はおまへんわいなア、けれど此處の婆が六十近いのに白粉塗つて色氣狂ひやがなア」

おかつ 「私いが白粉つけたら色氣狂ひか」

奥八「へエ……貴方は」

おかつ「此處の辻村の家内です」

奥八「へエ——そんなら中のお婆さんは」

おかつ「ナニ中のお婆さんとは誰の事だす」

奥八「イヤア天候不穩、桑原々々」

ト意氣込おかつを見て、鬨り半分に下手へ逃げ込む、二人の此の話中、おきん儀兵衛酒を出して酒盛をして居る、おかつは不思議の思入にて秘と表に立つて内の様子を立聞きする、儀兵衛は夫婦膳を出して小鉢物を上に載せて酒をつけながら、

儀兵衛「サア何にも無いが一杯行かふ」

おきん「大事おまへんかいな」

儀兵衛「何に家内が歸つたら何んぞか胡魔化すわい」

ト酒を進め居る時、二階より民子下りて来て、

民子「御隠居さん 料理屋から未ダ内の誂へ物は持つて来ませんでしたか」

ト之れにておきんは膳の傍を飛び退く、

儀兵衛「イヤ〜構へん〜、之れは二階を貸して有る人ぢや」

ト民子に向ひ、

「へん何んぞ料理屋へ言ひなされたのかい」

民子「風呂から歸りに小鉢物を言ふて来ましたのですよ」

ト肴の色敷を詳しく言ふ、儀兵衛は其の肴敷を聞いて膳の上を見て、

儀兵衛「アツ仕舞ふた、其れでは之れがそふぢや、一寸箸付けたが、旦那に内々で

な——」

ト頭を掻く、

民子「マア……」

トあきれ、此の以前より正夫梯子の中程に見て居りて、

正夫 「御隠居其の内々より此の内々の方が」

トおきんを指して冷笑しながら、

「大事でせう」

ト儀兵衛は頭を掻きながら、

儀兵衛 「ヤア……粹な藤井さん、苦勞人ぢや、失禮ぢやが之れ持つて御夫婦で何處
でか一杯やつて來さくなはれ」

ト紙幣を渡す藤井は受取つて、

正夫 「其れは濟みませんねえ」

民子 「貴方そんな鐵皮面な事を」

儀兵衛 「奥様何うぞ」

ト兩手を合す、

正夫 「大丈夫僕は苦勞人ですよ」

おきん 「貴方はん濟みまへんなア」

民子 「イエ何卒御緩りご」

正夫 「サア行ふ失敬ッ」

ト云ひつゝ二人は表へ出る、おかつは傘にて顔を隠して一寸下手へ木蔭れる、兩人
は花道へ行きながら、

民子 「ネエ貴方今にもお婆さんが歸つたら大變でせうねへ」

正夫 「其れで君子危きに近かよらずサ、何うせ歸れば無事には濟むまい」

ト此の時突然におかつ、後より大聲にて、

おかつ 「モウ歸つて居りますのや」

正夫 「ヲ、」

おかつ 「シツ……」

ト正夫の何か云いかけるを止める、上手にて小意氣な唄を聞かす、おかつは目配して
若き日の影

兩人に早く早く去れよと知らず、民子正夫の兩人承知して揚幕へはいる、おかつは再び立聞きする。

おきん 「意氣な聲が聞へますな」

儀兵衛 「あれは御隣ぢやが、お前ご私も昔はあんな意氣な世界も有つたなア——」

おきん 「其れも皆んな昔の夢で、連合には死に別れて淋しい暮しをして居る身は、あんな意氣な唄を聞かされては堪まりませんわいな、其處へ行くご貴方は好きな奥さんが有つてお楽しみだんな」

儀兵衛 「そふ言はれるご恐れ入るが、モシヤ今の家内でも死んだなら何うや、お前ご一所に暮さふやないか」

おきん 「あんた夫れは本統だすかいな」

儀兵衛 「誰れが嘘を言ふものか、元々嫌で別れた中ぢやなし、三日の日でもお前ご夫婦になつて死にたいわい」

おきん 「マアく嬉れしやの私も其れなら本望やわ、そうして今の奥様は病身だんのか」

儀兵衛 「イヤ其れが至つて達者すぎる位の達者ものでなア……」

おきん 「其れでは何時の事や判りまへんなア」

儀兵衛 「サア——ナア……」

ト腕組をして考へる、突然に、

おかつ 「何時でも死にまつせ」

ト怒鳴りながら中へ還入る、二人は吃驚する、端唄の囃子になり、おきん、おかつは宜しく附け廻りとなる、宜しく氣味合にて、おきん表へ出かける、唄の切れ、

おかつ 「一寸貴方待ごくなはれ」

おきん 「何づれ近日左様なら、チホ、、」

ト又唄になり、静かに表へ出て下手へゴソく還入る、おかつあつけに取られて見て

居る、儀兵衛は盃をおかつに差す、唄の止まり、

儀兵衛 「えらい早かつたなア……一杯行かふ」

おかつ 「馬鹿に仕なはん」

ト盃を叩き付ける。

儀兵衛 「何んで怒てるのや、今の女はなア……」

おかつ 「昔の貴方の色女で、私いが有つたら邪魔になりますのやらう、何時でも死にまつせ、それまで待たねば、サア殺しておくなはれ」

儀兵衛 「ハアン皆聞いてたなア、何にもお前を殺すぞ、誰れが言ふたい、最も今のは昔の女には違ひは無いが、お前が有るのに夫婦になるぞ誰れが言ふたい、お前が死んだらと言ふ話ぢやがな」

おかつ 「サアそれなら死ぬのを待つて居なはるのやろ、私も辻村の家附きの娘で貰ふた養子に死ぬのを待たれる様では、末が案じられます、今の内に離縁します、

出て行くくなはれ」

儀兵衛 「ヤイ言ふな、六十一に成つて養子先きを離縁されて今更ら外へ養子に行けるかへ」

おかつ 「今の狸婆に暮らしたら宜しいがな、早ふ出て行け……」

儀兵衛 「ヨシそふ言へば出て行くぞ、先刻の娘の様に止めるなよ」

おかつ 「誰れが止めるかい、家附きの娘ぢやい、養子は出て行くのが當り前へぢやい」

儀兵衛 「ヨシ出て行つてやるわい」

ト立ち上る詠への囃子になり、儀兵衛は帯をしめ直す、羽織を着る時、揚幕より伯父眞田吾作分家の拵へにて、後より新太郎お千代牡丹餅を重箱に入れて抱へていで来る

新太郎 「モシ、御分家の伯父さんぢや有りませんか」

ト吾作は後を振り向き、

吾作 「チ、新太郎かい」

お千代 「何方へ」

吾作 「何方らぢやないわい、今神戸から内へ歸つたら内の婆が、又本家の若夫婦が喧嘩して私が留守で有つたためへ隠へ行くに聞いたので、心配して尋ねに行く處ぢやい」

新太郎 「何うも相済みません、モウチャンと仲が直つて居るのです」

吾作 「其れは結構ぢや、第一お千代が何時も氣儘すぎるわい」

お千代 「エ、全くですよお父さんやお母アさんの圓滿振りにすつかり刺戟されて自分が悪いと氣が附きましたの、伯父さん済みまへん……」

吾作 「成程兄貴夫婦こ來たら、見こもない程圓滿ぢやでなア」

新太郎 「之れからあれを見本とする積りです、其の御禮に牡丹餅を夫婦で持つて行く積りです」

吾作 「其れは御馳走ぢや、其れでは私も一所に行てよばれよう」

新太郎 「サア何卒御一所に入らつしやいまし」

ト三人連れにて舞臺へ來り内へ這入ながら、

吾作 「今日は」

儀兵衛 「イヨウ分家か、サア、此方へ」

新太郎 「お父さん、先程は済みません」

お千代 「牡丹餅が出来ましたゆへ持つて参りました」

儀兵衛 「ア、そうか、コレおかつよ娘が牡丹餅を拵へて來たさい、一ツ喰べんかい」

ト優しく言ふ、

吾作 「相變らず仲が好いな」

ト新太郎千代に向ひ、

若き日の影

「お前等見習へよ、夫婦喧嘩一ツするぢやなし、姉貴は若時分から嫉妬一ツするぢやなし、女の道を嗜んで居るで、此の年まで圓滿に行けるのぢや、

チヨト之れを見習へ」

儀兵衛「全く分家の言ふ通ぢや、母は此の通り閑雅で格氣一ツするぢやなし、私に打たれても殴られても家附きの娘と言ふ顔付をするぢやなし、出て行けなんて言ふた事がないでなア、……なア婆さん、

おかつ「ムウ……」

ト口ごもりながら、

「チットお母さん見習いなはれ」

千代「全く私が悪るかつたのです、出て行けなんて言ふて牡丹餅を顔へ投げつけたりして、堪忍しこくなはれや」

吾作「そりやする事が無茶ぢやがな、マア〜新太郎堪忍してやつてや」

新太郎「イヤそれも全く私が悪いのです」

吾作「何んのチットやソット悪い事が有つても、其處亭主關白の位ぢやがな」

儀兵衛「分家えらい事を言ふた、少々悪い事が有つても亭主關白の位ぢや」

トおかつの方に向ひ、

「サア牡丹餅を婆さん、一ツ喰べないなア」

ト重箱の中より箸に狭んでおかつの前に牡丹餅を出す、おかつも我が子や分家の手前是非なく牡丹餅を取つてチット儀兵衛の顔を見、ムラ〜格氣の思入にて思はず其の牡丹餅を儀兵衛の顔に投げ付ける、木頭、

吾作「コレ姉貴何をするのぢやへ」

おかつ「フム……イエ娘が斯んな喧嘩を仕ましたのぢやがな」

ト之れにて吾作はお千代、新太郎を睨み付け、

吾作「馬鹿ッ」

若き日の影

二七八

ト新太郎、お千代は両手をついて極り悪氣に頭を下げる。

儀兵衛 「悪い真似ぢやなア」

ト宜布思入にておかつを見て苦笑する、各自變つた科し、氣味合にて此模様宜しく眺
への賑かな囃子にて、

滿來



線脱の心

心の脱線

【三場】

(一) 某市電通用門夕方の場

(二) 新内師匠お百合宅

(矢野、栗岡二階借合住居の場)

登場人名

市電車掌 栗岡源太郎

同 向井

同 北野

同 寺田

同 井口

同 吉田

同 俵

【俳優】

蝶六

一郎

三郎

笑將

五良丸

五丸

蝶次

同 米本

同 福村

同 吉井

同 元山

同 樋口

同 泉尾

同 梅山

同 星野

同 山本

女 おさこ

同 おまよ

同 細井

カフエーの女

保

時太郎

勢蝶

時丸

五市

巳之助

祐三郎

長佐久

蝶太夫

林蝶

蝶の丸

大磯

出前持

安公

蝶七

新内師匠

お百合

胡蝶

漢法醫

本田鐵骨

太郎

市電運轉手

矢野良吉

五郎

(1) 市電通用門夕方の場

本舞臺平舞臺上手斜に市電會社煉瓦の建物、前は一面煉瓦塀の通りにして少し上手に出入口有り、其れに市電通用門と記したる木札をかけ、下手は斜にカフェーの表口を見せ、アラヒビールのベンキ塗の家根看板を庇にかけ、其の下は白布のカアテんに日進亭と記せし物を掛け有る、其他カフェーの裝飾宜布、舞臺中央にベンチを置く、眺への囃子にて幕開く。

ト車掌向井、北野、寺田、吉田、俵、米本、福村、吉井、元山、樋口、泉尾、梅山、星野等各自休み居る、何れも新聞を読み居る者、苺を吸ひ居る者、雑誌をなし居る者、講談本を読み居る者、ブラ〜散歩をして居る者、何れもガヤ〜と集合なし居る處へ、監督井口通用門より出來りて、門前に起立をして、

井口「諸君ッ、本日は西廻り増發になる事は中止になりましたから、西廻りの諸君は全部歸つても宜しいヨ、今課長からの命令です」

一同「ヤア有難い〜」

ト何れも喜びながら上下へ別れて、ワイ〜と言ひながら這入る、監督井口は云捨てて其儘門内へ入る、北野は石に腰をかけて書物を読み居る、寺田は向井を見て、

寺田「サア北野君も向井君も同じ道だ、一緒に歸らうか」

向井「マア一ト足先きに歸つて呉れ給へ、僕は少し此處に用が有るから」

寺田「何んの用か知らんが、増發中止でヤット我が體になつたのぢや、運轉手も

車掌も恁んな事がないと勤まらないよ、早く歸つて一杯やらう」

向井「五月蠅いな、歸るなら君一人で歸り給へ、僕は此處に一寸用がある云ふてるぢやないか」

寺田「恁んな處に何んの用があるのぢやい」

ト之れにて向井は笑いながらカフエーを指して、小指を出して見せる。

「ハアン、成程日進亭の一枚看板お靜の顔を見て歸らうと云ふのぢやな」

向井「其の通り、彼の顔を見て歸らんご内へ歸つてから飯が不味いからなア」

寺田「偉い熱心やなア、そんなら何にも恁んな處でいても何時表へ出るやら判らんお靜坊を待つて居るより、中へ這入つてビールを一杯呑んだらお出でやす言ふて、こほれる様な愛嬌で傍へ來て呉れるぢやないか」

向井「そふく〜レコガ」

ト指で丸を拵へて、

「續かないからな、毎月貰ふ月給はお靜坊の顔を見たさに大抵二三日で遣ひ果すがな。月の中は廿日餘りは内でお粥を喰べて、此處で顔丈け見るのを樂しみにして居るのぢやがな……」

寺田「便り無い男やな、堅いが自慢の此處のお靜坊やがな、動きまあすチンクの自由に成る代呂物やない、變な事を言ふたら肘鐵砲を喰はされるで」

向井「誰ぞ其んな目に逢ふた奴があるのかい」

寺田「慥に有る、其れ以來此の日進亭へヨウ這入らぬ奴があるのぢや」

向井「馬鹿な奴だなア、誰れぢやい」

寺田「僕やがな」

向井「厚皮しい奴ぢやなア、恥を知れツ」

ト讀書なし居る北野の方を向いて、

「タイ北野、此奴日進亭のお靜坊を口説て肘鐵砲を喰いよつたのぢやで」

ト之れにて北野思入有つて、

北野「ヤアミウ〜止めを刺したなア」

向井「エ、誰ぞお静の止めを刺した奴が有るのかい」

北野「矢張り腕がたつよつて、ミウ〜退治よつたのぢやな」

向井「ヘン……何んと言ふ奴ぢやい」

北野「何んと言ふ奴ぢやてツ、お前相手が岩見重太郎ぢや、怎んな排々でも堪らんわい」

向井「チイ其りや何んの話ぢやい」

北野「此の本の話ぢやがな」

寺田「チイ向井此方へよつてゐい、黴られて居るのぢやがな、チイ北野一緒に歸らうか」

北野「まだ西廻り臨時發車が有るので待この命令ぢやないか」

寺田「其れは只ツタ今監督から中止になつたから歸つて宜いと言ふて來たがな」

北野「ア、そうか、岩見重太郎で現つになつて居たので、一寸も知らなんだ、有難い〜サア向井も一緒に歸らうか」

寺田「向井は此處のお静坊の顔が見たいと吐して、阿呆が此處へ出て來るを待つて居るのぢや」

北野「お静坊の顔が見られるなら、僕も一緒に待つてゐるわ」

寺田「アツ上には上の有るものぢやな」

向井「そう言はないな、又此の道は別ぢやでな」

北野「ヒヤ〜」

寺田「ア、此奴賛成してけつかる」

三人「ハハ、ハハ、」

ト笑になる、日進亭の内よりお静美しき女給姿にてツカ〜と出來り、三人の顔を見て

お静「今日は……」

北野「ヒヤ……今日は……」

寺田「チイ」

ト北野の胸を軽く突き、

「近目の癖に厚皮しいな、お前に言ふたのさ違ふがな」

トお静に向ひ、

「イヤお静さん今日は……」

向井「チイお前も厚皮しいがな、お前一人にお静さんが挨拶したのぢやなからふ、慥うして三人居るのだから、詰り三人に言ふた挨拶やがな……ナアお静君……」

お静「チホ……左様で御座います、何誰も今日は」

向井「其れ見いな何誰も言ふ御言葉ぢやがな、挨拶するなら、一緒に言うたら

宜いがな」

北野「そんなら一緒に言はうか……今日は」

寺田「厚皮しいな一緒になら、君一人今日は言はんご皆一緒に言ふたら怎うやいな……サア一二三ツ」

三人「今日は……」

ト一緒に言ふ。

お静「厭ですよ、皆さん、たんに玩弄にして下さいね……」

向井「イエ〜決して玩弄にしたのではないです、お氣に障わつたら許して呉れ給へ」

寺田「君々謝るなら一人りで謝らんご僕にも謝らしていなア」

北野「總て公平に行動を取ふぢやないか、謝るなら一緒に謝らうぢやないか、一二三ツ」

三人「堪忍……」

ト大声にて一緒に脱帽して謝る。

お静「モウそんなに人を玩弄にしないで下さい……一寸尋ね度い事が有るので
から教へて下さいね」

三人「何んです、くくく」

お静「あの車掌の栗岡さんは、モウ歸られましたか知らん」

寺田「栗岡？……こは怎んな男やいなア」

北野「栗岡云へば運輸手の矢野良吉と一緒に新内の師匠の骨屋町の二階を借り
てゐる男やがな」

お静「へエさうですの……其の栗岡さんは未だお歸りにはなりませんか」

北野「あの男も西廻りですから、モウ直ぐ此處へ歸つて來るでせう」

お静「アラママアさう嬉しいはね」

ト少し艶めかしくして恥しそうな科

北野「お静さんく、其の栗岡言ふ男に何んの御用が有るのです」

お静「アラそんな聞いちや厭や、……幾等私だつて恥しいわ……」

ト袖にて顔を隠す。

向井「ウ……ン……」

ト唸りながら辨當入れのバスケットを落して反り返る。

寺田「タイ君何を唸つて居るのだ」

向井「僕は一種の感に打たれた、タイ北野其の栗岡言ふ男は美男子かへ」

北野「冗談ぢやないよ、食パンの様な面の男だ」

トお静に向ひ、

「ネエお静君、……君は間違つて居るのぢやないか、栗岡と一緒に二階を借
りて居る矢野良吉云ふ運輸手ぢやないかい」

お静「イ、エ矢野さんは先きから私の方の卓で、コーヒーを呑んで居られます、私の會いたいのには栗岡さんですよ、濟みませんが今にも此處を通られたら、私が戀れて居るから一寸立寄つて遣つて呉れいご御言附けをして下さいね一生のお願ひですからね」

ト此時内よりお静さんくと呼ぶ。

お静「エ、モウ五月蠅いお客だね……」

ト一同に會釋をして愛嬌よく中へ入る、後に三人顔見合して詰らぬ思入れ、向井はボツ／＼下手へ行く。

寺田「ナイ向井何處へ行く」

向井「阿呆らしい、お静の戀の取持に此處にチット立つて居られるかい」

寺田「違ひなしぢや……ナイ北野怎うする」

北野「怎うするも怎うするも有るかい……お先き……」

ト二人の前を通り、早足にて下手へはいる。

向井「彼奴現金な奴ぢやなア……」

ト訛への囃子になり、捨白詞にて向井、寺田の兩人は下手へ這入ると同時に花道より女髮結お里同弟子お豊の二人、何れも仕事着の拵へにて出で来る、七三にて、

おとよ「お師匠はん、此方から歸つたら廻り道だんな……」

おさと「判つてゐるわいな、廻り承知で来て居るのやわいなア……」

おとよ「ハ……ン成程、盗人の晝寝も當が有るんだすなア」

おさと「私に何んの當が有るやいな」

おとよ「萬事ははぬが花、飲み込んでます」

おさと「これ人を翫りなはんや」

ト宜しく舞臺へ居直る、同時に通用門より栗岡車掌の拵へにていで來りて、中央にて出會ひ、

栗岡「チ、お里……何處へ行くのや」

ト之れにてお里はおとよの手前を氣を兼ね、栗岡に一寸目顔で知しながら、

おさと「チ、栗岡はん、何時ものばらしまして濟みまへん」晩にでも結びに行きま
すよつて不悪らず早ふ歸つて貴方の頭を潰しておいておくなはれ……」

栗岡「何を言ふてるのや、俺の頭が潰せるかい」

おさと「イ、エ……あの……貴方のおかみさんのんだがな」

栗岡「仕様も無い事を言ひないな、俺に鼻が有るかへ、俺の鼻はお前ぢやがな」

トお里を一寸指先きで突く、お里は益々ハラ／＼として居る、お豊は飲込み顔にて、

お豊「お師匠はん／＼宜しいやないか、モウ此の間から勘付て居ますがな、女髪
結が男を持ってぬ言ふ規則はなし、之れが私の色男や／＼紹介し／＼くくなはれいな」

トお里を退けて栗岡の前へ進み出で、
「へ……初めてお目に掛ります、モウ／＼内のお師匠はんは、未だほんの生

娘で世間知らずで御座りますよつて、何卒可愛がつて上げてお呉れなはれ
何卒外の女子に乘替切符にならぬよふ……爾んな事をしなはつたら直ぐに
お冠が曲りますから、御注意を願ひます……サア／＼何卒傍へ行たけ／＼
なはれ、サア／＼中の釣革へ願ひます」

ト栗岡をボンとお里の傍へ突やつて、
「動きます……チン／＼」

ト眺への囃子にてお豊は小走りて上手へ這入る、栗岡は呆氣に取られて後を見送りな
がら、

栗岡「チイ彼奴は何んぢやへ、ヨウ喋舌る奴ぢやなア……」
おさと「あれは内の弟子のお豊言ふて喋舌だんがな、あんな奴に喋舌られたら得
意先一杯に知れまんがな、目であれだけ仕方をしてるのに、ヅカ／＼物を云ひ
なはるよつてカア／＼になりましたがな」

栗岡「偉い濟まへんな、怎うせ僕の様な男に浮名を流したら、みつこもないでせうよ……」

おさと「そんな皮肉を言ひなんないな、別に浮名が厭やと言ふ譯やないけれど、髪結は男を持っては手が下がるなんて人が言ひますよつて、マアく隠せる事なら隠して置く方が宜いと思つて、一寸逢ふにも忍んで逢うて居るのやおまへんかいな今日も貴方の姿でも見へるかと思つて弟子に氣兼ねして此の門の前まで廻りをして来て居ます、其んな心も知らいでヨウそんな嫌味が云へますなア……」

トシクく泣く、栗岡傍へ來りておさとの肩を摩でながら、

栗岡「チイく俺が悪けりや謝るよつて往來で泣いたりするな、濟まんく之れ此の通りぢやく、機嫌を直して呉れく」

ト宜しく宥め乍ら頭をペコく下げて居る、此の内カフエーの中より運轉手矢野良吉稍々酒に酔ひたる科にてヌーと出で來りて、此の體を見て居り、此の時突然に、

矢野「堪忍してやつてなア」

ト云ふ此の聲に兩人驚き飛び退く、栗岡はおさとを後へ隠しながら矢野を見て、

栗岡「アツ矢野君か……君未だ歸らないのか」

矢野「先へ歸つて茶でも沸して君の歸を待つて居らねば濟んと思つたが、此の日進亭の表迄來るミフラく、這入りたふなつてなア、……誠に濟ん」

栗岡「其んな事は構はんけれど、君餘んまり酒呑むミ體に悪いで」

おさと「一寸栗岡はん、あのお方は、」

栗岡「何時も話をして居る僕と一緒に二階借りして居る矢野良吉と言ふ至つて親しい友達ぢやがな」

おさと「ア、左様か……貴方はん初めまして」

ト一寸挨拶をする。

矢野「骨屋町の大工のお上さんでお百合さん云ふ新内の師匠をして居る内の二

階を借りまして、共同生活を致して居ります、市電の運転手……貴女のお名前は何時も栗岡君に惚けられて、ヨク存じて居りますハハ……」

ト笑ふ、

おさと 「マア……極りの悪い……」

ト栗岡に向ひて、

「貴方そんな事を言いなはつたのかいな」

矢野 「云うも云はぬも有りますかいな」貴女の寫眞を寫眞立にかけて、毎日々々僕が惚け臺に成つています」

栗岡 「君々そんな事云うない」

矢野 「でも事實だから仕様が無いぢやないか、内へ歸つたら其の寫眞の前に座つた儘で、丸でハイカラの八重垣姫ですがな、嘘と思ふなら今夜見においでなさい」

おさと 「マア嬉しいやのふ……貴方今夜行ても大事おまへんか」

栗岡 「でもお前八疊一間を矢野君と二人で借りてるのに悪いがな」

矢野 「大丈夫、僕は氣を利かして出て行く……何卒早ふ来て遣つて下さい」

おさと 「貴方済みまへんな、一寸貴下今夜六時に骨屋町へ尋ねて行きますわ」

栗岡 「矢野……大事ないかいな」

矢野 「大事ないも糸瓜も有るかいな、友達の中で水臭ひ事を云うて呉れるなへ、

武士は相見互ぢや」

おさと 「まあ、粹なお方……貴下六時に屹度行きますぜ」

栗岡 「ヨシ酒でも買つて待つてるぞ」

おさと 「あの一寸……」

ト栗岡を上手へ連れ行き紙人より拾圓紙幣を出して、無言にて栗岡の手に握らし、「これでなア、牛肉でも買つてなア……」

栗岡「そんな事を……」

おさと「黙つて取つて置いておくなはれな」

ト此の體を矢野は眺めて、

矢野「噫々羨やましいなア」

栗岡「矢野君、僕産れてから初めぢやがな」

ト詔の囃子になり、捨白詞にてお里は嬉しさうに上手へ這入る。

矢野「栗岡君は仕合せ者やな」

栗岡「詰り合縁奇縁と言ふのやなア、戀愛問題は敢て男振りぢやないな、詰り此處だな」

ト胸を叩いて見せる。

矢野「全くだ、君の實意が先方へ届いて成立つた立派な戀ぢや、詰り戀の勝利者ぢや、世に片思ひの戀に煩んで一人で煩悶して居る程、憐れな不幸なものはない

ナ

ト思入有つて言ふ、栗岡は不思議そうに矢野の顔をヂツト見詰め乍ら、

栗岡「矢野君此の頃何うかして居るなア、何んぞ心に思つて居るのぢやないか、其れなら明して呉れても宜いぢやないか、兄弟同様にして同じ二階を借りて暮して居る中ぢやないか、一人で煩悶して居るなんて水臭いぢやないか」

矢野「有難う迎も此の大阪に居ては其の煩悶の絶間がないから、國へ歸らうかと思つて居るのだ」

栗岡「大變な事やな、一體原因は何んぢや」

矢野「必ず人に言つて呉れなよ」

ト駄目幾度も押してお静の寫眞を懐中より出して見せる、栗岡は其の寫眞を眺めて、

栗岡「チ、之れは此の日進亭のお靜ぢやないか、……ハアンさうか毎日此處へ苦しい手元で來て居ると思つたら、成程……チイ何を煩悶する事が有るかへ、成程

此のカフェーの一枚看板やけごも、多寡が洋食屋の女給事ぢやないかいナ、丸々出来ぬ話ぢやなし、殊に慙うして寫眞迄貰ふ仲なら、九分通りまで成り立つてゐるがな」

矢野「御本人の御手づから頂いた寫眞なら嬉しいが、或る人が持つて居たのを頼んで十圓で賣つて貰うたのぢやがな」

栗岡「エ、此の寫眞が十圓……マアよふそんな阿呆らしい金を出したなアハハ……」

矢野「君はさう言ふけれど、僕の身になれば十圓が百圓でも高いと思はぬ、實ものぢや、夫れを君が冷笑するなんてツ、僕より君の方が餘ッ程水臭ひなア」

栗岡「イヤ失敬、其れ程君が思うて居るなら、當人に打突かつて言ふて見給へ、男は當つて碎けぢやがな」

矢野「サア夫れも何度も言ふと思つたが、あの人の前へ行くに胸がドキ」

して、張切て物も言へず、夫に若や厭ぢやと言はれたら幾千丈の谷間へ突き落されたような氣になるで有らうし、其れが恐ろしいで、まだ何にも言はずに毎日顔丈け見て楽しんでるよふこ、喰べこも無い洋食を毎日、喰べに來て居るが、苦しい手元でモウ時計も無ければ着物も無い、愈々質草も無いから國へ歸つて仕舞はうと思つて居るのぢや、君も随分達者でなア」

ト悄れ切つて語る。

栗岡「何んぢやか物が憐になつて來た、其の位來ていて大抵先きの様子でも知れそふなものぢやないか」

矢野「夫れも愛嬌の宜いお静さんゆへ好いて呉れてるのか厭なのか、怎う考へても僕には判らぬ、此の頃は夫れ斗り考へて電車の運轉をしてるても、何處を廻つて居るのやら、走つて居るのやら、四五日前にも車掌の信號が耳にはいらす、五ツも六ツも停留所を停車せず乗客には叱られるし、課長には始末書を取られるし

此の調子で運轉していたら、明日當りは屹度入を曳き殺すに違ひないわ……」

栗岡「君そんな剣呑な事を言ふな」

矢野「サア其んな間違の無い内に國へ歸らうと思つて居る……」

栗岡「君それほどの決心が有るなら、鐵砲の玉で當つて見たら怎うだい、成り立てば結構、若しや厭やと言へば君も面白うなからうから、國へ歸り給へ、何れになつても言ふて見たら怎うだい」

矢野「成程なあ厭と言はれたら失戀して故郷へ歸る積りだから、他國の恥は掻き流し思ひ切つて言ふて見ようか……」

栗岡「賛成くさう仕給へ」

矢野「其れでは君先へ歸つて僕の手廻りの物を全部取り揃へて、荷物にして待つて居て呉れ給へ、駄目極まれば面白くないから直ぐに内へ走つて歸つて其の荷物を持つてステーションへ出るからねへ」

栗岡「そないに短兵急に用意をせいで宜いぢやないか」

矢野「それは君水臭いよ、失戀の僕を永く大阪へ置いて苦める積りか、其の荷物が不必要な事になつたら、僕の幸福ぢやないか」

栗岡「夫れもさうだな……」

矢野「君納まらずに早く荷物を拵へて置いて呉れく」
ト無理に手を取つて立たす。

栗岡「ヨシくさう云ふならマアく損にして拵へて置く、君善い便を聞かして呉れ給へ」

ト捨詞白にて花道へ行きかける。

矢野「栗岡君、永々心安くして呉れたね、随分達者で暮し給へ」

栗岡「ライ其の挨拶は未だ早いぢやないか」

矢野「十中の八九は此の結果になるだらう」

栗岡「心配するな男は此處より」

ト顔を指して、

「此處ぢやわいな」

ト胸を叩いて見せる、眺への囃子になり栗岡は花道へはへる、同時に出前持安公出前持の拵へにて上手より出で来りて、矢野の前を通り過ぎんとするを矢野は見て、

矢野「チイ安さん、忙しいね」

安公「チ、矢野はん、貴方も毎日宜う御出勤だすなア」

矢野「會社ですか」

安公「イ、エ私の處の店へだすがな、へ、、、知つてますぜ」

ト矢野の顔を眺めながら意味有氣に云ふ。

矢野「變んな事を言うて呉れるな、……ア、君一寸頼みがあるのだがね、アノお静さんを一寸此處迄来て貰らつて呉れ給へなア」

安公「お静さんなら内に居はりますかな、マア中へおはいり」

矢野「夫れがねへ中には澤山な人が居られるからね……」

安公「ア、成程萬事飲み込んでます」

ト胸を叩いて中へはへる、入れ違ひにお静カフェーの中より顔を一寸出して、

お静「マア矢野はん、まだ入らつしやるのう」

矢野「誠に呼び立て、濟みません」

お静「厭ですよ、アラ黙つて先きから一人で此處に入らつしたのですか」

矢野「イエ今迄栗岡君と一緒に居りましたのです」

お静「さう栗岡さん、……さうして栗岡さんは何處へ入らつしたのです」

矢野「今の先き歸りました」

お静「エ、」

トツカくと前へ出て揚幕の方を見詰、

「アラ逢ひたかつたわねへ」

矢野「栗岡に何にか御用が有つたのですか」

ト少し急ぎ込んで云ふ。

お静「エ、今朝から待ち懸がれて居るのですもの……」

矢野「へエ怎んな御用ですか」

お静「あら極りの悪い、其んな事聞いちや厭やよ」

ト艶かしく云ふ、矢野は不安の科にて、

矢野「ねへお静さん、怎んな御用か知りませんが、御存じの通り同じ二階借りで同居居をして居るのですから、御用なら御取り次を仕ませうか」

お静「でも貴下に御願ひをしては、尙更極りが悪いのですもの」

矢野「何んの貴女、女子が男に惚れるのが、何んの極りの悪いものですか、假令誰に惚れたつて戀は自由ですもの、さうぢや有りませんか」

お静「アラ頼母しい事を仰在るのね、誰れに惚れても惚るのは人間の自由ですわねへ」

ト矢野の傍へ腰掛をする、

「でも」の方から言ひ出して厭ぢやと言はれりや慘ですからねへ」

矢野「夫れも當つて見なけりや判らないぢや有りませんか、若も駄目極まつたら荷物を擔けて國へ歸る迄ですがな」

お静「成程若も厭言はれれば故郷の横濱へ歸りますわ、貴方蓮葉者笑つていらつしやるでせうねえ」

矢野「笑ふものですか、一生懸命です」

お静「貴方を信じて御願ひしますから、何卒秘密にねへ……」

トラプレターを矢野の手に握らす、矢野は茫として、

矢野「之を僕に下さるのですか」

お静「イエ栗岡さんに」

矢野「イエ……栗岡にですか……」

ト落膽の科、お静は何の氣もなしに、

お静「矢野さん笑つちや厭ですよ、今朝から之を渡したいミ栗岡さんを戀れて居たのですよ、女の方から恁んな物を御渡しするので、私の方ちや一生懸命厭なら厭や應なら應ミ慥に返事を下さい、栗岡さんにおこしづけを願ひますよ」

矢野「ハイ……慥に承知致しました」

ト矢野憤怒と煩悶をなしながら、ブル／＼慄へながら返事をする。

お静「矢野さん、笑つちや厭やですよ」

ト矢野の膝に伏して顔を隠す、矢野は無我夢中の様な科をして、其手紙を内懐のポケットへ入れ居る時、安公出前箱を提げていで來り、此の様子を見て、

安公「イヨーお楽しみ……」

ト此の聲にてお静はハット飛び退く、皆々氣味合の木頭にて、各自替つた思入にて道具一轉する。

(2) 骨屋町お百合宅二階借の場

本舞臺平舞臺正面吹抜き夜の町屋を見たる遠見、手摺付きの縁先き座敷には粗末なる本箱、硯、机、新圍、二枚折の屏風、其の後に夜具二組を置き、壁の帽子掛けに車掌の帽子、洋服、石摺板の額を掛け、座蒲團、箱火鉢等亂雑に置き、上手は家根の上に物干臺を設く、下手は障子家體經て、二階へ昇降の段梯子の手摺を設けて、舞臺切穴より昇降の出來る事、上手の壁の前に柳行李の麻繩にて荷造なしたる物を置き、總て二階借の一室の體、宜布詔への囃子にて道具納る、

心の脱線

三一二

ト中央に栗岡は粗末なる和服と着替へ、おさと丸鬚の小意気なる女房拵にて差向ひに座し居る、道具納ると同時に、栗岡は箒を持って座敷を掃除する、おさとは下手へ來りて牛肉を煮る仕度をなす、栗岡は座敷の座を秘と梯子段の處へ捨てる等の事有る、其の内おさとは涼爐、膳、すき鍋其他あしらい等を中央へ運び來りて兩人差向に座し酒の燗をして牛肉を煮て中好く飲み始める、二階下にて新内の稽古をなし居る心にて、新内の聲と三味線の音を聞かす栗岡は盃を取り上げて、

栗岡「サア一杯いかう、恠うして丸鬚に結ふて前に座つて居るこ、丸で女房の様な氣がするなア」

おさと「氣がするなんて水臭い女房だんがな、殊にあんな意気な聲が聞こへて居るし、尙堪りまへんな、恰度貴方が直次郎で、私いが三千歳だすな、其んな役割だすやらう」

栗岡「イヤア悪い直次郎やな、……ハ……下の姐はん中々好い聲やらう」

おさと「へエ先きから感心してますのや、お師匠はんだんな」

栗岡「下の上さんが新内の師匠をして居るので、近所の娘や一人前の男が親不孝な聲を出して稽古に來て居るのぢや、毎晩矢野君と二人で惱まされるぜ」

おさと「チ、矢野はん云へば歸りはりまへんな」

栗岡「サア僕も其れて心配して居るのぢやマアあゝして荷造はして有るしなア」

おさと「あれは矢野はんのですか、何んであんな荷造がしておますのや」

栗岡「其れはお前の聞く事ぢやないわい」

おさと「水臭い人……何んほなミ物を隠しなはれ」

トブーとする、又新内の三味線の音聞へると、下より漢法醫本田鐵骨老けたる醫師殿味澤山な拵へにて梯子段より、顔を出して、

本田「栗岡さん、良い香ひがするな」

ト此の聲におさとは一寸驚く、

栗岡「イヨー先生まあお上り、コレおさこ大事な人ぢや矢張り下へ稽古に来て居る漢法の御醫者はんやがな」

本田「御醫者ご云はれるに極りが悪いが、慫うして薬の靴は持つて居るが、ほんの病家は一軒か二軒診察の歸り道に毎度親不孝の聲を出して居るものでエへ、
、、」

おさと「其れ見なはれ、皆聞へてますがな、サア先生まあ此方らへ」

本田「ハイ〜」

ト傍へ來ながら、

「イヨー差向ひでお楽しみぢやなア、大正の直次郎ご三千歳の濡事を一寸拜見しに來ましたのぢや」

栗岡「皆聞こへてるのぢやがな、先生一杯如何です……」

本田「イヤ〜一日逢はねば千日ご云ふ様な意氣な處へ出る様な私は役割ぢやな

い、只だ三千歳さんのお顔丈け一寸拜見に來たので……」

トおさとの顔を覗き込んで、

「イヨー成程、下の連中が八釜敷言ふ筈ぢや、栗岡はん貴方の直次郎では三千歳の方が一寸役不足ぢやなアハ、」

栗岡「大きに憚りさん、ほつこいて……」

ト一寸怒る科し、

本田「マア怒りないな、聞けば髪結さんぢやそうなが、髪結さんにしては惜しいな」

トおさとを見て、

「貴女おいくつぢやな……」

トヂツトおさとの傍へ座す。

栗岡「チイ〜お里此方へ寄つていく、其の先生女に掛つたら誰でも口説ご云

ふ評判の先生やでなア」

本田「こりや聞き處ぢや、栗岡君、苟も長袖の本田鐵骨……」

ト云いッ、詰寄る。此時下より師匠お百合の聲にて、

お百合「先生くお稽古だすせく」

本田「ヨー心得たり」

ト立ち上り、

「何れ後より、栗岡君少し牛肉を残しておいてくれ玉へ」

トあたふたして捨詞白にて下へおりる。

おさと「あの先生慌て者のだんな」

栗岡「一寸足らんのぢやがな」

ト爛徳利を取り上げて、

「チ、酒が無い入れて來ふ」

ト立ちかける。

おさと「厭だつせ私いが傍に居るのに、お里酒入れて來いミ女房らしく言ふさくな
はれいな」

栗岡「フム……チイお里酒入れて來い」

おさと「ハイ」

ト立上りて壹升壇の酒を銚子に入れる、誂への新内になる、

「いで行く後に稻川諸手を組み思案涙に暮れ居たる」

ト此の新内の内に矢野は悄々と下よりいで來る、栗岡は見て、

栗岡「チ、矢野君歸つたか」

おさと「チ、先程は失禮を……」

ト言ふのも矢野は耳にも掛ず、上手へ悄れながら上手の方に行き柳行李の荷造して有るを見てカツトしたる科、其れより帽子掛にある栗岡の帽子、服、其他の物を皆下手へ

放り投げる、栗岡は變な顔をしながら、

栗岡「君何にするのやな……」

ト品物を拾ひ集めて片付ける、矢野は座蒲團にて疊の上を強く叩く、

栗岡「無茶しないな、食物に塵が這入るがな」

ト兩袖を持つて蓋をする。

矢野「偉い濟んな、八疊の座敷を二人で借りてたら此處から」

ト指にて疊に筋を引き、

「は僕の權利やないか」

栗岡「何に怒つて居るのや、お先きへ失禮して一杯遣て居るのや」

おさと「失禮ですが一杯何うです」

ト傍へ行き箕盆杯を前へ持つて行くを矢野はお里の手より引ッたぐる、栗岡は變に思ひながら、酒肴の道具を下手へ運び、徳利とコップを持つて矢野の傍へ來りて、

栗岡「チイ矢野君、マア一杯やり給へ」

ト矢野は栗岡の顔をヂツト睨め附けながら、

矢野「お樂みだなア、ヘエン君は色男だよ」

栗岡「チイ君變な事を言ふなよ、合住居の處へ女を引張り込んで悪いと思つたけれど、先き君が差支へないと言ふて呉れたから、此奴が來たのぢやないか、其れが君の氣に入らねば慙んな者は直ぐ歸すよ」

矢野「何に歸らすに及ばんぢやないか、精々色男振りを發揮して、女を垂すのは君の本能ぢやないか」

栗岡「チイ矢野下らぬ事を云ふな、何んほ日本が進歩しても僕の顔で女が垂せるものかへ」

矢野「既に遣つて居るぢやないか、色は決して顔ぢやない此處だ」

ト胸を叩きながら、

「自ら告白して遺憾なく色魔の本音を吹いたぢやないか」

栗岡 「色魔ごは、誰が色魔だ」

矢野 「貴様ぢやないかッ」

栗岡 「何をッ」

矢野 「何んだッ」

ト双方意気込むを、おさとは栗岡の袖を引きながら、

おさと 「申し貴方……何んぞムシヤクシヤ腹だつしやらうさかい、逆らいなはんな色魔なら色魔で宜しいやおまへんかいな」

栗岡 「今日は矢野は何うかして居るわい、チイ君何か氣に入らぬ事が有るか知らんが、其麼子供見たいな事を言はずに、此處へ來て一杯呑んで呉れたら何うだい」

ト云ふ、矢野は机に俯向いて両手で頭を押へて煩悶の科、栗岡色々と親切に宥めなが

ら、酒を幾度となく進める、矢野はサモ煩さそうに頭を上げ大聲にて、

矢野 「八ヶ釜敷い人の思案中に耳觸りだ、黙れッ……」

栗岡 「何んでそないにボン／＼言うのや、先きの話しの結果でも悪るかつたのか」

矢野 「ヤイ栗岡……」

トキツトなつて、

「未だ人の前で其の結果を聞いて俺に恥を搔したいのかッ」

栗岡 「アッ悪るかつた／＼、人の前で聞く事ぢやなかつたナア」

トおさとに向ひ、

「チイおさごお前は氣の毒やが今晚歸つて呉れ、一寸矢野君の體に附いて相談が有るよつてな……」

おさと 「エ、歸れと言いなれば歸へりますけれど、……何んぞ心配な事でも有り

ますの……」

栗岡「其がな」

ト栗岡はおさとの耳元へ口をもつて行きヒソ／＼話をする、矢野突然に頭を上げて、

矢野「人の前で内証話ならするなッ」

栗岡「イヤ失敬々々、チイ貴様」

トおさとに態とらしく、

「早く歸れ、友達の心配中に来る奴が有か、矢野君に謝つて早く歸れッ」

ト目で知らしながら口先きにて叱る、お里は呑み込んで、

おさと「誠に矢野はん御心配の中へ参りまして済みまへん、私は御免蒙ります、左様なら／＼／＼／＼」

ト幾度も言へど矢野は無言、

栗岡「君々モウ此奴は歸る言ふてるぜ、何んぞか言うてやつてなア……」

矢野「煩いな恚うして首肯て居たら、無言の挨拶ぢやないか、これぢや不可ないのか……左様なら……」

ト大聲にて不愛想に言ふ、おさとは喫驚する、栗岡はおさとに目配をして早く歸れと云ふ新内の掛り。

「摩利支天にも見放され、角力の冥加に盡きたかと思はず拳を握り絞め、身を慄して男泣き始終を聞いて女房が涙隠して、

ト此の新内に、おさとは秘と二階を降りて行く、矢野は此の内に立上りて衣服を着替る、栗岡は傍へ行き着物を着替へる手傳をする、矢野は栗岡の手傳のを一チ／＼捻ぢけてポン／＼と云ふ、栗岡は少しも逆はず機嫌を取りながら手傳ふ、栗岡の帽子洋服杯を矢野は皆取り投げる。

矢野「之れは俺の衣桁ぢやないか、何ぞ掛けたのかッ」

栗岡「イヤ濟まん、／＼／＼」

ト何事にも逆はず謝り居る、矢野は膳を取り出し飯を喰ひかける、栗岡は又手傳ふと矢野は捨て置けと云はぬ斗りにして膳の前に座す、栗岡は銚子とコップを持ち來りて前に突出して、

栗岡「サア君飯を喰うなら、君の分が有るよつて牛肉を焚き直そうか」

矢野「止して呉れ、君さ色女さ突ツキ合つた残りものを喰ふ程、毫碌はしないのだからね」

栗岡「失敬く、之は僕が悪るかつた、然し君は餘ッ程興奮して居るよつて、サア之れ一杯呑んで今晚はグーミ寢給へ、又明日機嫌が直つてから話を聞かう」

ト牛鍋を片付けながらコップ酒を注いで親切に矢野の前に出す、矢野は其の手を振りながら感極りたる科にて、

矢野「栗岡君ナゼ君は恁んなに親切にして呉れるのや、……毆つてくれ給へ、毆つて毆つて、毆り殺して呉れ、僕は死にたい……のだ」

栗岡「ライそんな馬鹿な事を言ふな、多寡が女一人の爲に何せ其魔氣になつたの

ぢや、僕は情無いと思ふ、一體静さんは何んぞ云ふたのだ」

矢野「其の静さんには外に惚れて居る男が有るのだ」

栗岡「へん……お静さんから惚れて居るさは何處の男ぢやい」

矢野「其の男云うのは栗岡源太郎、貴様だツ」

栗岡「アハ、矢野餘り人を馬鹿にするなよ、静さんが俺に惚れて居る筈が有るかへ」

矢野「其の手で人に油断をさし、女を垂して色魔の本能を發揮するのだらう」

栗岡「チイ矢野餘りな事を言ふなツ」

矢野「言つたら悪いかツ」

栗岡「何にツ」

矢野「何んだ喧嘩かツ」

ト矢野は血想變へる、栗岡は氣を取り直して、

栗岡「イヤ決して君に喧嘩する積ぢやない、けれごなア、君何んぞ思ひ違ひをし
てやせんか……」

矢野「思ひ違ひにも何んにも先き君と別れてお静さんに逢つて、僕の心の内を明
かさうと思つたら、然う云はぬ内に先方から散々貴様の惚氣を言ふて、之れを秘
密で渡して呉れよ、戀の使迄させられて歸つてたのだ」

ト以前のレターを懐中より出して前に投げつける、栗岡は不審の科にて其の手紙を取
り上げ、

栗岡「果てな……成税俺の宛名ぢや……」

ト不思議な顔をして封を切りかける。

矢野「栗岡、俺の前で読み上げて幾等でも俺に恥をかゝせ……」
トキツト云ふ。

栗岡「そんなら止めるわい、何も恥を搔せる積ぢやないぢやないか、そんならも
う讀まんご置くがな」

ト手紙を前へ置く、

矢野「ア、さうかく讀ずに置いては俺が頼まれた甲斐が無いぢやないか、先き
は貴様に命掛けた、イミカロミか確り返事を聞いて呉れいご頼まれて來たのだ、
サア讀めく」

栗岡「イヤ……封は切らん、ヨシヤお静さんが俺を何んご思て呉れても、君に對
して俺は恁麼手紙の返事は出せん」

矢野「其れぢや頼まれて來た俺の顔を潰すのだなア……」

栗岡「決してそんな譯は無いわなア」
矢野「其んな譯ぢや無けりや、サア讀め、くくく」

ト手紙を栗岡の手に無理に渡す、據なく栗岡は封を切りかけると、矢野は身を慄しな

がら、

矢野「サア高聲上げて讀め、さうして俺に恥を搔せ、此處で俺を苦めろツ」

栗岡「チイ餘り無理を言ひないな、俺は此の手紙の封は切らぬ、萬事お静さんに逢うて話をする」

ト手紙を前へ掲げ出す。

矢野「チ、さうしたら、俺の前では極りが悪いから、俺を出し抜いて窃ミ逢う積りだらう、卑怯者めツ」

栗岡「卑怯者ミは、誰に吐したのだツ」

矢野「貴様に云うたが、判らんのかい」

トコップの酒を栗岡の顔へかける、栗岡もカツトとして血相をかへて、

栗岡「宜い加減にさらして置けツ」

ト矢野の横面を殴る。

矢野「畜生打チやがつたなア」

ト立上る矢野は胸倉を取る、兩人宜く立ち廻りとなる新内の掛り、

「これのふ待つて稻川さの、只ツた一言いひたい事、見れども跡は雲霞帯引しめて、夫の後、慕うてこそは」(新内の三味線にて樽太鼓の音になる)

ト此の間に兩人は宜しく立廻りする、ト物干の取合の障子を壊して物干へ二人で出で、上を下へと紺打をする、此の音に師匠お百合は下より昇り來りて、

お百合「何んぢや、ガタ／＼騒しい猫かいな……」

ト云ひつゝ其處を見て物干の兩人の組打を見て喫驚なし、

「アツ……一寸先生ッ来て下さいな、……先生早ふ上つて来て下さい」

ト騒ぐ、此の聲にて本田は薬の鞆を片手に提げ落付いて昇り來り、

本田「何んぢや騒しい……」

お百合「先生、喧嘩ですよ」

本田「何に喧嘩……こは何處ぢや〜」

トウロ〜當りを見る。

お百合「あの物干ですよ二人が組打してますがな」

ト物干を指す、本田は其の方を見て、

本田「ヒエ……姉はん、危ない〜下へ降りてなはれ〜」
お百合「頼みますよ〜」

ト言捨て、お百合は下へおりる、本田は羽織をぬきで飛んで行き、栗岡を押へ付けて居る矢野を捕へて座敷内へ突き飛ばす、栗岡起き上りて矢野に、かゝらんとするを兩人の中へ割つて入り、宜しく兩人を上下自分は中へ割つて三人座す……。

本田「待て〜、マア待て」

矢野「捨て置け〜、畜生め、心残りの無い様に彼奴を殺して、俺も死ぬのだ」
栗岡「殺せるものなら殺して見ろツ」

矢野「サア来い」

ト又双方立かけるを本田は止める、益々兩人は止めるも聞かず勢ひ込む。

本田「よしやれツ、モウ止めんぞ何方か殺されるか死ぬか遣る處まで遣つて見い然し腕力で遣るのは何方も卑怯ぢや、假令理の無い悪い方でも腕力の強い方が勝に違ひない、其んな不公平な喧嘩は不可ない、決闘は公平にやりなされ、何方も同じ武器を持って公平に立合をしなされ、拙者も掛合ぢや、立派に立ち合になつて上げるわい」

矢野「ヨシ……サア栗岡何んな武器を撰んで来い」

本田「イヤ〜其の武器は私が上げる一寸待ちなされや」

ト藥靴の中より小壘を二本取り出し白色の散藥を傍にあるコツブの中へ小々ツ、入れ其の上に水を注ぎて能く廻して前へ置き、

「サア此處に二ツの藥が有る、一立は呑む置ぐ廻る毒藥ぢや、一方は通常

藥ぢや素人のお前方では何方が怎うごも判るまい、之れ程公平な武器があるか、天の神様が悪い方に飲すに極つて居る、自然に受ける天の配劑ぢや、サア二人共男らしう立派に飲めツ」

矢野「ヲ、面白いサア栗岡飲めツ」

栗岡「貴様から飲めツ」

矢野「貴様から飲めツ」

本田「何方も遠慮せんご遣んかへ、今命の取り遣りをせねば置かぬと言うたぢやないか、度胸がないか、サア飲めく」

矢野「慙うなれば間がぬけるわい」

本田「一體兄弟同様の途中で何にからの喧嘩ぢや」

栗岡「何に元の起は此の手紙からです」

ト前の手紙を指す、本田は其の手紙を拾ひ上げて、

本田「何んぢや、栗岡様静江より……お前さんに來た手紙ぢやないかい」

矢野「其れを讀すに男の顔を潰しやがつて俺に隠れて逢ふさいふのは男のする事かい、卑怯者め」

栗岡「何にツ」

ト双方意氣込む本田は、コップを前へ出して、

本田「サア飲めツ」

ト之れに兩人又ヂツトする。

矢野「サア栗岡飲めツ」

栗岡「貴様から飲めツ」

ト押問答有つて、此の内二人はコップを取上げては中を見て置きコップを持變る事杯宜く有る。本田は二人の様子を見て、

本田「割に二人共度胸が無いな、ハハ……然し何んぢや知らんが之れを讀ねば様

子が知れぬわい、栗岡はん私が讀むぞ」

栗岡「よろしい、讀んごくなはれ」

矢野「サア讀め……」

ト力む……本田は開封して。

本田「何にく恥しながら恥を忍び貴方を男に見てお縋り申上候、矢野良吉様は貴方様は兄弟同様の間柄に聞及び、思ひ切つて此手紙認め候次第、必ず御笑ひ下さらず、御同情の程願はしく、蓮葉者ご御下けすみも候はんが、恥しながら兼てより矢野様を戀し参らし」

矢野「先生く間違てやしまへんか」

本田「何んの間違ふものか、さう書いて有るわい」

矢野「ヒエ……一寸拜見」

ト手紙を取つて讀む。

「店へお出の度毎に胸の動機を覺へ候、一層打ち明けては何度も決心は致候へ共、御存の不束者、お氣に入るやら入らぬやらに案じ参らせて勇氣も挫け、一人胸のみ焦し参らせ候、此の上は御兄弟同然の貴方様のお力に縋り、此の手紙を認め候、何卒く矢野様の御心中を御聞き下され、色良き御返事下され度、偏にお縋り申参らせ候、今宵其れに窃に貴方のお宅迄お返事を伺ひに参上致し候まゝ、蓮葉者よごお笑ひなく、御同情の程神かけ祈り上参らせ候かしく」

ト讀み終り、栗岡と顔見合す、宜しく思入れ。

栗岡「チイ矢野、何を聞いて來たのぢやい」

矢野「栗岡君、濟まぬツ」

ト言ひ乍ら傍のコップ薬をニツ共一度に呑む栗岡は喫驚して、

栗岡「ヤツ飲んだなア」

心の脱線

ト慌て、介抱を仕かけるを本田は止めて、

本田「安心せい双方共重曹ぢやわい」

二人「エツ……」

ト驚く、此の少し以前より、お百合は立派に着飾をして来りし静江を連れて来り突然に
お百合「矢野はん、お客様だすぜ」

トお静を座の中へ入れる。矢野と顔見合す木頭。

お静「栗岡さん、笑つちや厭よ……」

ト矢野の傍へ行きて縋る、矢野は極り悪き科、栗岡は一ト安心と云ふ科、本田はニヤニヤ笑ふ、各自氣味合にて誂への囃子にて、

満来

曾我の家五郎喜劇全集 第五編終

大正十一年四月五日印刷
大正十一年四月十日發行

【定價金壹圓九拾錢】

曾我の家五郎全集
第五編

不許複製
無斷興行



著者 曾我の家五郎
發行者 東京市京橋區橋本町十五番地 株式會社 大 鐙 閣
代表者 久世 昌三
印刷者 東京市京橋區南船場七番地 牧 口 駒 三 郎

(牧口駒三印)

發行所

東京 京橋橋本町
大阪 三休橋南

株式會社

大 鐙 閣
振替東京三三六一八・大阪二七一五五

著郎五家の我曾
集全劇喜郎五家の我曾

◁錢二十料送 = 錢十九圓一册各▷

第六編	第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
グ八警	若絲百	茶一定	祕色片	鬼彌純	厚槍利
ト百鐘	き瓜行	つ期	密あ	兵金	益
パツシ	日のの	音のの	の眼ぶ	衛の	化配
ン娘音	影花基	頭檜妻	髮鏡み	葛榎箸	粧踊當
日沖四	心八奴	面投玉	住珍香	出時	・・・・・ 轆岩
影の海	重垣さ	の羽	椎の	世の	牲立
の白	脱物		吉幽馬	の	のつ
花浪波	線語ん	皮織章	詣燈方	鼻緣	舟矢

刊續下以 = 册二十集全

309
72

終

